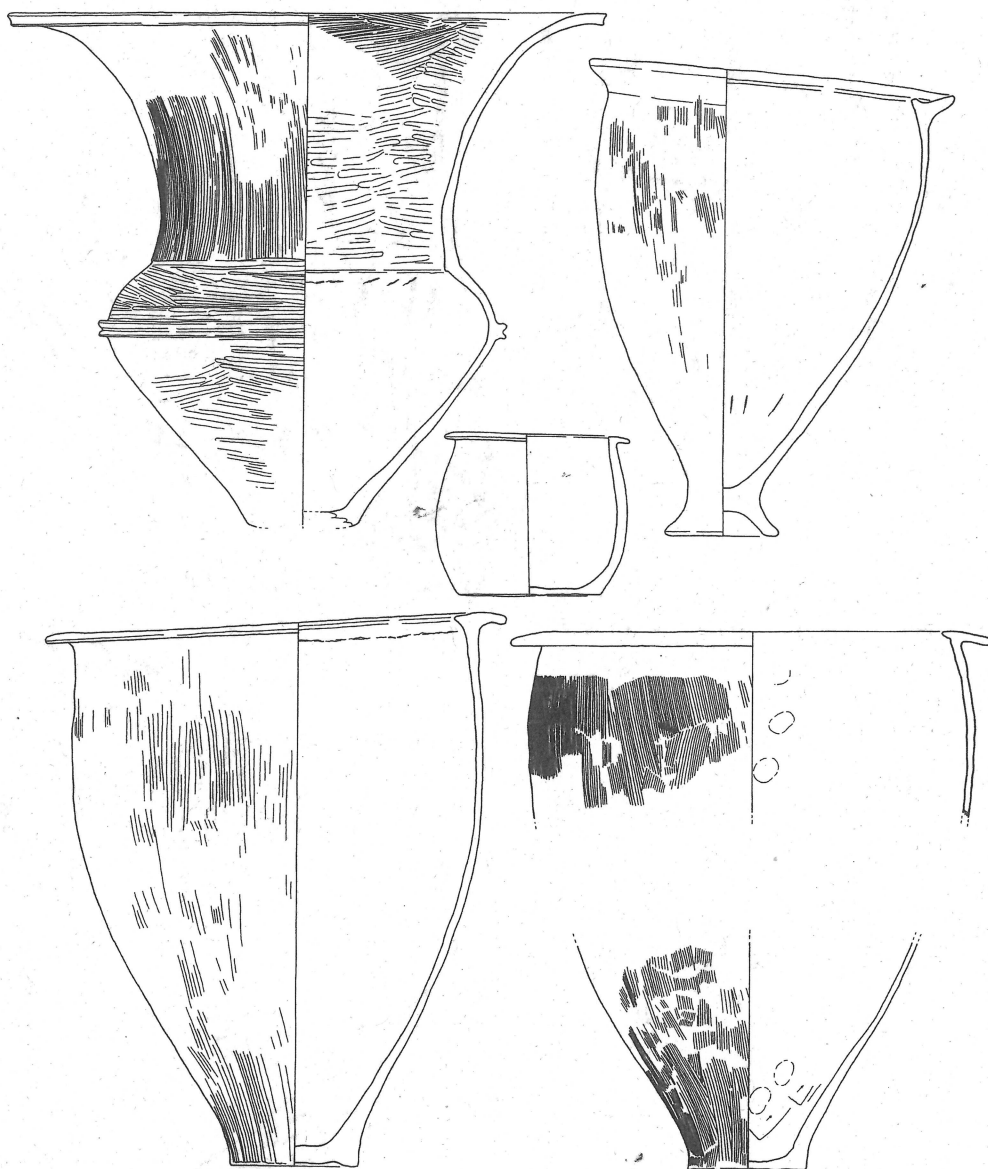


国見町文化財調査報告書(概報) 第5集

じゅう その
十園遺跡Ⅱ

—国見町多比良地区町営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—



4区 SB02出土土器 (33~34P)

2005

長崎県国見町教育委員会

発行にあたって

このたび平成12年度から平成15年度にかけて実施しました多比良地区圃場整備事業に伴う十園遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

十園遺跡は国見町多比良に位置し、東側には土黒川が流れるなだらかな丘陵地の水田地帯に所在します。古代条里制の痕跡も見うけられるのどかな田園風景の中に遺跡は広がっております。遺跡地より南側を望めば雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えていています。また、北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

十園遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、その一部はすでに報告（十園遺跡2004）済みであります。今回報告いたします弥生時代の集落跡は、二重の堀に囲まれた環濠集落です。住居跡や堀の内部からは大量の土器が検出されており、当時の人々の生活を復元する上でまたとない資料となりましょう。また、住居の形態や大きさからも当地域の人々の特徴ある生活ぶりを窺うことができます。資料の中には有明海沿岸地域よりもたらされたと考えられる資料も多く、海上交易による他地域との交流関係の存在も垣間見えます。

国見町の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。

本町では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本町にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課の皆様の皆様のご指導に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成17年3月31日

長崎県国見町教育委員会
教育長 原 宮 之

例 言

1. 本報告は2000年～2004年（平成12年度～平成16年度）に実施した多比良地区町営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する十園遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。

2. 調査は国見町教育委員会が担当した。

調査は1999年1月21日から1999年1月28日（平成10年度）に範囲確認調査を実施し、その結果をもとに下記の期間発掘調査を実施した。

2000年8月25日～2000年12月22日（平成12年度）	1区～15区・南地区
2001年5月11日～2002年2月9日（平成13年度）	16区～21区・C区
2002年8月1日～2003年2月10日（平成14年度）	22区～38区
2003年6月5日～2003年12月25日（平成15年度）	39区～47区
2004年5月21日～2004年6月17日（平成16年度）	48区～50区

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教 育 長	阿比留 亨（平成12年度）
	同	教 育 長	原 宮之（平成12年度～現在）
	同	教 育 次 長	吉田 正昭（平成12年度～現在）
	同	社会教育係長	江副俊一郎（平成12年度～平成13年度）
	同	社会教育係長	柴崎 孝光（平成14年度～現在）
調査担当	同	文化財調査員	竹中 哲朗（平成14年度～現在）
	同	文化財調査員	松崎由紀子（平成9年度 試掘調査）
	同	社会教育係	辻田 直人

4. 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・植木貴道・東 文子・林 繁美・寺中典子・村子香織・益田豊明・竹田将仁・峯 祐介・竹中・辻田が行い、遺物の実測・製図・復元は早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井 恵・竹中・辻田が行った。写真は現地調査・遺物写真ともに竹中・辻田が行った。土器の撮影、表等の作成には、柳原重矢子の協力を得た。

5. 遺構・遺物実測の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6. 空中写真撮影業務は（株）九州文化財研究所に委託した。

7. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。

8. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は旧日本測地系による。

9. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言ご協力いただき、記して謝意を表します。

宮崎貴夫（長崎県学芸文化課）、古門雅高（長崎県学芸文化課）、本田秀樹（長崎県教育委員会）、渡邊康行（埋蔵文化財サポートシステム）、早田 勉（古環境研究所）、松本慎二（長崎県南有馬町教育委員会）、土橋啓介（長崎県島原市教育委員会）、荒木伸也（長崎県有家町教育委員会）、宇土靖之（長崎県有明町総合文化会館）、安楽哲史（長崎県瑞穂町教育委員会）、本多和典（長崎県深江町教育委員会）、田崎博之（愛媛大学）、岡部裕俊（福岡県前原市教育委員会）、勢田廣行（熊本県荒尾市教育委員会）、吉田政博（熊本県荒尾市教育委員会）、長崎県教育委員会、渡邊秀孝（長崎県国見町長）、国見町産業振興課、国見町郷土史研究会、（株）野田建設（順不同）

10. 本書の執筆は竹中哲朗・辻田直人が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。

11. 本書の編集は竹中による。

目 次

巻頭図版
目次
本文
図版

第1章 調査の経緯と経過	1 p
第2章 これまでの調査成果と採集資料の紹介	3 p
第1節 これまでの調査成果 (竹中)	第2節 表面採集資料の紹介 (竹中)
第3章 弥生時代の環濠と住居跡	13 p
第1節 環濠集落の検出 (竹中)	第2節 弥生時代中期の環濠と住居跡 (竹中)
第3節 弥生時代後期の環濠と住居跡 (竹中)	
第4章 奈良・平安時代の溝	61 p
第1節 50区 SD01・SD02 (辻田)	第2節 50区 SD01出土土器 (竹中)
第5章 考 察	74 p
第1節 十園遺跡出土須恵器について (竹中)	
第2節 奈良・平安時代の溝・掘立柱建物 (竹中)	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1/20,000)	第12図 表面採集資料②(1/3)	9
第2図 調査区配置図(1/2,000)	第13図 表面採集資料③(1/3)	11
第3図 35区自然河川際での土器出土状況 (1/20)	第14図 表面採集資料④(1/3)	12
第4図 35区自然河川出土土器(1/3)	第15図 弥生時代の主な遺構の配置図 (1/1,500)	13
第5図 十園遺跡の条里遺構と検出遺構の配置 図(1/1,500)	第16図 23区 SD01セクション図(1/45)・平面 図(1/90)	15
第6図 47区検出建物群・柵列(1/200)	第17図 5区 SD01(1/30)	16
第7図 50区出土瓦片実測図(1/2)	第18図 23・24区 SD01出土土器(1/3)	17
第8図 4号建物関連(P127柱抜き取り穴)出 土土器(1/3)	第19図 23区 SD01出土石器(1/3)	19
第9図 12・13・14区 SD01出土石帯(2/3)	第20図 32区 SB01(1/60)	20
第10図 12・13・14区 SD01出土土器(1/3)	第21図 32区 SB01出土土器(1/3)	21
第11図 表面採集資料①(1/3)	第22図 32区 SB02(1/60)	23
	第23図 4区 SB01(1/30)	25

第24図	4区 SB01出土土器(1/3)……………27~28	第59図	破片の大きさ……………65
第25図	4区 SB01出土土器(1/3)……………29	第60図	50区中層集中遺物(1/3)……………66
第26図	4区 SB02(1/30)……………31	第61図	50区 SD01出土土器(坏・蓋類1/3) ……………66
第27図	4区 SB01出土土器①(1/3)……………32	第62図	50区 SD01出土土器(甕・甑1/3)……………68
第28図	4区 SB01出土土器②(1/3)……………32	第63図	50区 SD01出土土器(坏1/3)……………69
第29図	4区 SB02出土土器(1/3)……………33~34	第64図	50区 SD01出土土器(高台坏1/3)……………69
第30図	26区 SD01・02(1/60)……………35	第65図	50区 SD01出土土器(蓋1/3)……………69
第31図	26区 SD01(1/30)……………36	第66図	50区 SD01出土土器(高坏1/3)……………71
第32図	26区 SD01出土土器(高坏・鉢1/3)……………37	第67図	50区 SD01出土土器(甕1/4)……………71
第33図	26区 SD01出土土器(壺1/3)……………38	第68図	島原半島周辺の地域(1/1,000,000) ……………74
第34図	26区 SD01出土土器(甕1/3)……………39	第69図	荒尾市皮籠田B窯址表面採集資料 (坏類1/3)……………75
第35図	26区 SD02出土鉄器(1/2)……………40	第70図	荒尾市皮籠田B窯址表面採集資料 (甕類・壺類1/3)……………75
第36図	26区 SD02セクション(1/30)……………41	第71図	荒尾市皮籠田B窯址表面採集資料 (甕類1/3)……………75
第37図	26区 SD02(1/30)……………41	第72図	十園遺跡出土須恵器(坏・甕類1/3) ……………77
第38図	26区 SD02出土土器(高坏1/3)……………43	第73図	十園遺跡出土須恵器(甕類1/3)……………77
第39図	26区 SD02出土土器(複合口縁鉢1/3) ……………45	第74図	十園遺跡50区溝出土須恵器 (坏類1/3・甕類1/4)……………79
第40図	26区 SD02出土土器(鉢1/3)……………45	第75図	倉地川遺跡・佃遺跡出土品 (坏・甕類1/3)……………79
第41図	26区 SD02出土土器(壺1/3)……………47	第76図	石原遺跡出土須恵器(1/3)……………81
第42図	26区 SD02出土土器(甕①1/3)……………47	第77図	矢房遺跡出土須恵器(1/3)……………81
第43図	26区 SD02出土土器(甕②1/3)……………49	第78図	吾妻町大園遺跡出土須恵器(1/3)……………82
第44図	26区 SD02出土土器(甕③1/3)……………51	第79図	50区溝・12~14区溝・47区建物群 (1/1,000)……………83
第45図	26区 SD02出土土器(甕1/3)……………51	第80図	35~36区自然河川際祭祀遺構出土品 (1/4)……………84
第46図	12区 SD03(1/60)……………52	第81図	C区 SD04出土土器(1/4)……………84
第47図	27区 SB01遺物出土状況・床面検出状況 (1/30)……………53	第82図	12~14区 SD01出土土器(1/4)……………85
第48図	27区 SB01出土土器(1/3)……………55	第83図	吾妻町大園遺跡出土土器(1/4・1/6) ……………86
第49図	27区 SB02平面・セクション(1/50)……………57	第84図	大瀬戸町串島遺跡出土土器編年表 (1/8)……………86
第50図	27区 SB02出土土器(1/3)……………57		
第51図	29区 SB01出土品(2/3)……………58		
第52図	29区 SB02平面・セクション(1/50)……………58		
第53図	29区 SX01(1/30・1/3)……………59		
第54図	29区 SK02平面(1/30)……………60		
第55図	27区 SK01平面・セクション(1/30) ……………60		
第56図	50区古代溝(1/30)……………62		
第57図	50区 SD01・SD02埋没過程模式図(上 段)及び十園遺跡検出の溝断面(下段) ……………64		
第58図	50区検出の溝配置図(1/1,000)……………65		

表 目 次

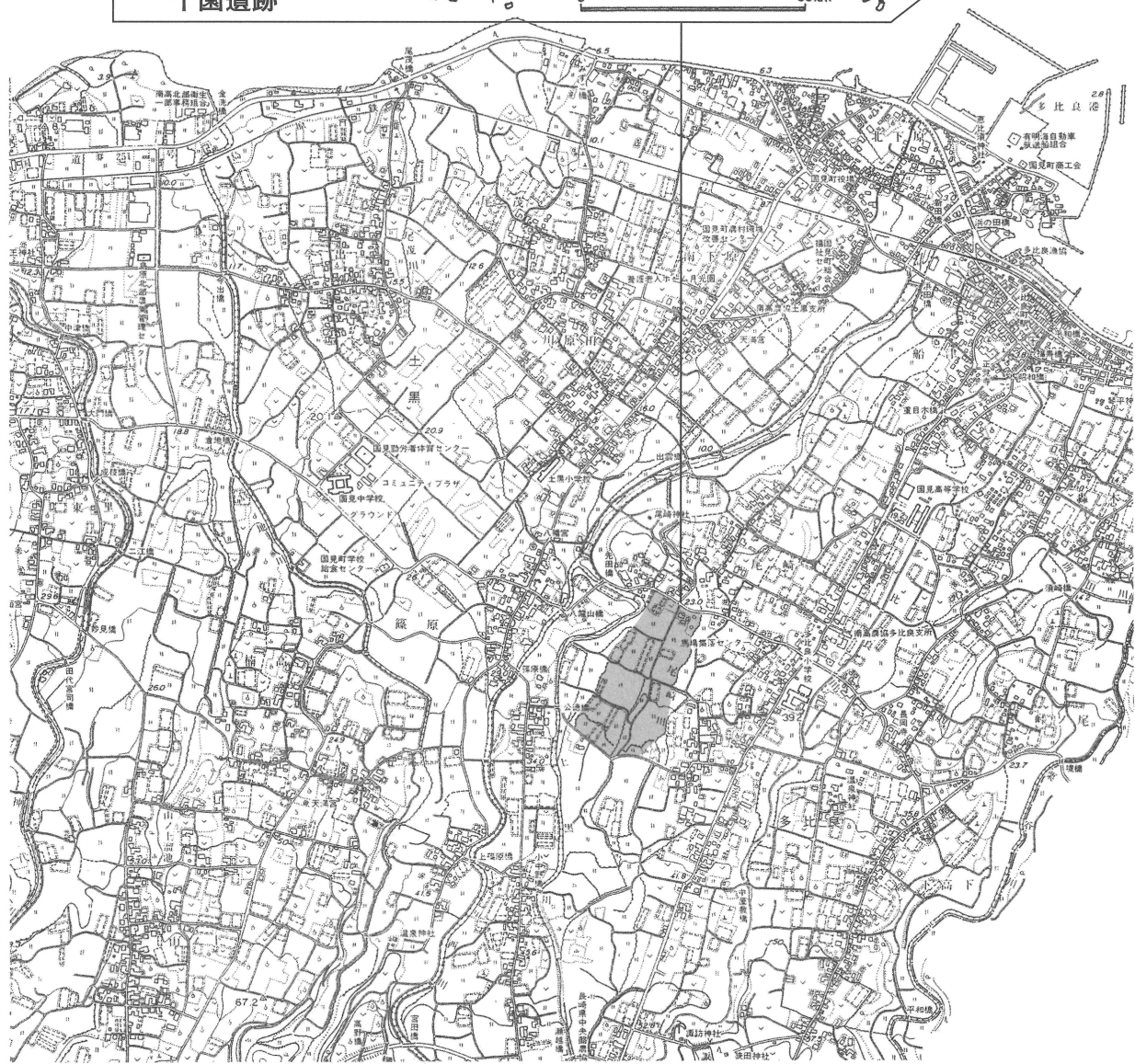
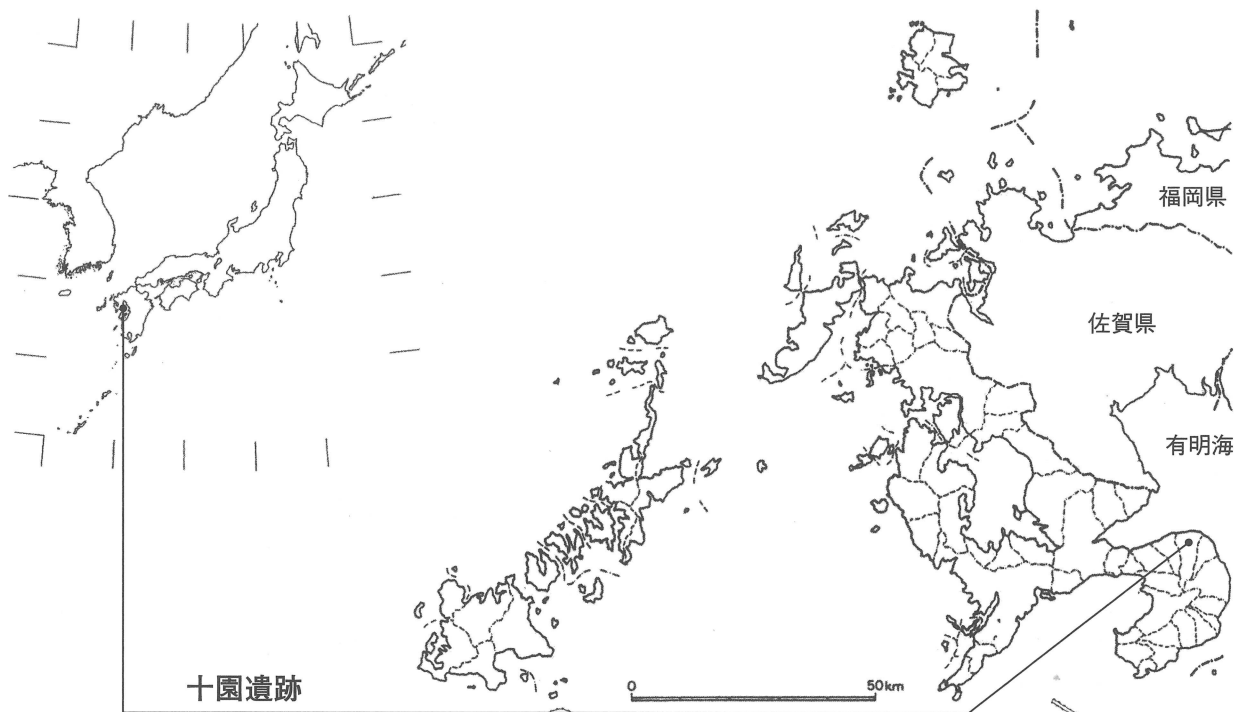
<p>第1表 表面採集資料①出土土器観察表……9</p> <p>第2表 表面採集資料②出土土器観察表……10</p> <p>第3表 表面採集資料③出土土器観察表……12</p> <p>第4表 23・24区 SD01出土土器観察表 ……18</p> <p>第5表 32区 SB01出土土器観察表 ……22</p> <p>第6表 4区 SB01出土土器観察表 ……26</p> <p>第7表 4区 SB02出土土器観察表 ……32</p> <p>第8表 26区 SD01出土土器(高坏・鉢)観察表 ……………37</p> <p>第9表 26区 SD01出土土器(壺)観察表 ……38</p> <p>第10表 26区 SD01出土土器(甕・支脚)観察表 ……………38</p> <p>第11表 26区 SD02出土土器(鉢・高坏)観察表 ……………42</p> <p>第12表 26区 SD02出土土器(複合口縁鉢)観察 表……………44</p> <p>第13表 26区 SD02出土土器(鉢)観察表 ……44</p> <p>第14表 26区 SD02出土土器(壺)観察表 ……46</p> <p>第15表 26区 SD02出土土器(甕①)観察表 ……47</p>	<p>第16表 26区 SD02出土土器(甕②・③)観察表 ……………48</p> <p>第17表 26区 SD02出土土器(台付甕脚部)観察 表……………50</p> <p>第18表 27区 SB01出土土器観察表 ……56</p> <p>第19表 27区 SB02出土土器観察表 ……57</p> <p>第20表 29区 SX01出土土器観察表 ……59</p> <p>第21表 50区 SD01出土土器(坏・蓋類) 観察表……………67</p> <p>第22表 50区 SD01出土土器(甕・甌)観察表, 出土須恵器(坏)観察表……………70</p> <p>第23表 50区 SD01出土須恵器(高坏)観察表 ……………71</p> <p>第24表 50区 SD01出土須恵器(坏・蓋)観察表 ……………72</p> <p>第25表 50区 SD01出土須恵器(蓋・高坏・甕・壺) 観察表……………73</p> <p>第26表 荒尾市皮籠田B窯址・倉地川遺跡・佃遺 跡土器観察表……………78</p>
---	---

図 版 目 次

<p>巻頭図版1</p> <p>巻頭図版2</p> <p>巻頭図版3</p> <p>巻頭図版4</p> <p>図版1 遺跡上空写真(昭和35年度国土地理院)</p> <p>図版2 遺跡上空より雲仙岳を望む 遺跡上空より有明海を望む 調査区4～14区上空写真 調査区23～33区上空写真 3・5・6区 SD01上空写真 3・5・6区 SD01上空写真</p> <p>図版3 23区 SD01上空写真 23区 SD01俯瞰写真(西より) 32区 SB01上空写真 32区 SB01・02俯瞰写真(西より) 32区 SB01床面上空写真</p>	<p>32区 SB01柱痕上空写真</p> <p>図版4 32区 SB01上空写真 32区 SB02上空写真 4区 SB01・02上空写真① 4区 SB01・02俯瞰写真 4区 SB01・02上空写真② 4区 SB01上空写真</p> <p>図版5 4区 SB02上空写真 26区 SD 上空写真 26区 SD01・02上空写真 26区 SD01上空写真 26区 SD02上空写真 27区 SB01上空写真</p> <p>図版6 27区 SB01上空写真 27区 SK01上空写真 27区 SK01上空写真(完掘)</p>
---	---

- 調査区48～50区上空写真
 50区上空写真
 50区溝上空写真
- 図版7 23区 SD01 b 区 I 層
 23区 SD01 b 区 I - II 層(東より)
 23区 SD01 b 区 II 層
 23区 SD01 b 区 III 層(東より)
 23区 SD01 b 区完掘(西より)
 23区 SD01 c 区 II 層
 23区 SD01 c 区東より
 23区 SD01 c 区東より(拡大)
- 図版8 23区 SD01 c 区下層(西より)
 23区 SD01 c 区完掘(東より)
 23区 SD01 c - d 区セクション
 23区 SD01 d 区セクション
 23区 SD01 a - b 区セクション
 23区 SD01 b - c 区東セクション①
 23区 SD01 b - c 区東セクション②
 23区 SD01 b - c 区西セクション
- 図版9 23区 SD01降雨後の状況
 3区 SD01検出状況
 3区 SD01完掘状況
 5・6区 SD01検出状況
 5区 SD01遺物検出状況
 5・6区 SD01完掘状況
 32区 SB01検出状況(西より)
 32区 SB01検出状況(東より)
- 図版10 32区 SB01遠景(西より)
 32区 SB01と02遠景(西より)
 32区 SB01遺物検出(東より)
 32区 SB01遺物検出(西より)
 32区 SB01床面検出(東より)
 32区 SB01作業風景(西より)
 32区 SB01セクション
 32区 SB01床面除去・柱痕検出
- 図版11 32区 SB01柱痕検出(拡大)
 32区 SB01柱6完掘
 32区 SB01を前に作業員さん集合
 32区 SB01保存作業①
 32区 SB01保存作業②
- 32区 SB01保存作業③
 32区 SB02検出(西より)
 8区 SB01検出状況(東より)
- 図版12 4区 SB01・02検出状況(南より)
 4区 SB01検出状況
 4区 SB01作業風景
 4区 SB01遺物出土状況①
 4区 SB01遺物出土状況②
 4区 SB01床面床面検出状況
 4区 SB01セクション①
 4区 SB01セクション②
- 図版13 4区 SB01炉址
 4区 SB01炉址断面
 4区 SB01完掘
 4区 SB02検出状況
 4区 SB02遺物検出状況
 4区 SB02遺物拡大①
 4区 SB02遺物拡大②
 4区 SB02完掘
- 図版14 26区 SD01検出状況(北より)
 26区 SD01遺物出土状況(北より)
 26区 SD01遺物検出状況
 26区 SD01完掘
 26区 SD01セクション①
 26区 SD01セクション②
 26区 SD02検出面(南より)
 26区 SD02遺物検出状況(南より)
- 図版15 26区 SD02上層集中
 26区 SD02下層集中
 26区 SD02下層集中拡大①
 26区 SD02下層集中拡大②
 26区 SD02下層集中拡大③
 26区 SD02鉄鏝出土状況
 26区 SD02粘土塊出土状況
 26区 SD02セクション(北面)
- 図版16 26区 SD02完掘
 26区 SD02セクション(南面)
 26区 SD02セクション
 (拡大・礫と粘土塊)
 12区 SD03検出状況

- 12区 SD03完掘状況
- 27区 SB01検出状況①
- 27区 SB01検出状況②
- 27区 SB01炭化材検出
- 図版17 27区 SB01炭化材拡大①
- 27区 SB01炭化材拡大②
- 27区 SB01床面除去後(東より)
- 27区 SB01柱検出(南より)
- 27区 SB01柱痕跡拡大
- 27区 SB02(pit 1 ~ 4)
- 29区 SB02検出面
- 29区 SB02床面検出
- 図版18 29区 SB02柱痕検出①
- 29区 SB02柱痕検出②
- 29区 SB02柱痕検出③
- 29区 SB02柱痕拡大
- 29区 SB02柱痕半載
- 29区 SB02完掘
- 29区 SB02紡錘車検出状況
- 29区 SX01検出面
- 図版19 29区 SX01半載
- 29区 SX01完掘
- 27区 SK01検出面
- 27区 SK01四分割
- 27区 SK01底面状況
- 27区 SK01セクション
- 27区 SK01完掘
- 29区 SX02完掘
- 図版20 表面採集資料(弥生土器・石器)
- 図版21 23・24区 SD01出土土器
- 32区 SB01出土土器
- 4区 SB01出土土器
- 図版22 4区 SB02出土土器
- 図版23 4区 SB02出土土器
- 4区 SB01出土石器
- 4区 SB02出土石器
- 図版24 4区 SB02出土土器
- 26区 SD01出土土器
- 26区 SD02出土土器
- 図版25 26区 SD01出土土器
- 図版26 26区 SD01出土土器
- 26区 SD02出土土器
- 図版27 26区 SD02出土土器
- 図版28 26区 SD02出土土器
- 図版29 26区 SD02出土土器
- 図版30 26区 SD02出土土器
- 図版31 27区 SB01出土土器
- 27区 SB02出土土器
- 29区 SB02出土紡錘車
- 4区 SB01・02出土品
- 図版32 50区 SD01出土土器
- 図版33 50区 SD01出土土器
- 吾妻町大園遺跡出土須恵器
- 図版34 荒尾市皮籠田B窯址表面採集資料に類似する坏類
- 図版35 50区出土瓦
- 倉地川遺跡採集品
- 佃遺跡出土品
- 十園遺跡12~14区 SD01出土須恵器
- 図版36 現地説明会の様子
- (2002年11月3日午後)
- 小学生の遺跡見学会
- (2002年11月6日午前)



第1図 遺跡位置図(1/20,000)

第1章 調査の経緯と経過

平成9年度より行われていた多比良地区町営圃場整備事業の工事予定地区に十園遺跡が含まれるため、平成10年度に国見町教育委員会が主体となり、国および県の補助を受けて遺跡の範囲確認調査を行った。その結果、従来の遺跡範囲より南側に遺物包含層や遺構面が広がることが確認された。調査成果を基に国見町産業振興課と教育委員会との協議により、設計変更により遺跡の大部分は盛り土により保存し、農道・用排水路および掘削により破壊される部分については本調査を行うこととなった。本調査は2000年（平成12年度）から毎年継続的に行い、本年度（平成16年度）現地の調査を終了した。（竹中）

以下各年度の調査成果を簡単に整理しておく。（各調査区は第2図参照）

－平成12年度（1区～15区、南地区）－

弥生時代中期から後期の環濠、竪穴住居跡、土坑群、古代の溝などが検出されている。古代の溝（12～14区 SD01）については前年度に報告している。弥生時代の遺構・遺物は第3章で報告する。

－平成13年度（16区～21区、C地区）－

古代の溝状遺構および中世の製鉄炉などが検出された。19区と21区で検出された中世の製鉄炉、C地区で検出された古代の溝などは前年度に報告している。

－平成14年度（22区～38区）－

弥生時代中期から後期の環濠、竪穴住居跡、土坑群などが検出された。また、旧石器時代の遺物包含層も確認されている。弥生時代の環濠および竪穴住居跡については、新聞報道および現地説明会などを行った。また、町内の多比良小学校による遺跡見学なども行われた。弥生時代の環濠、住居跡については第3章で報告する。旧石器時代の調査成果は、前年度に報告している。

－平成15年度（39区～48区）－

47区において奈良時代の大型掘立柱建物群が検出された。県内でははじめての大型建物群の発見であり、『肥前国風土記』に書かれている高来郡の中心的な施設に関連するものとして学術的に注目される。そのため、新聞報道や現地説明会などを行った。大型掘立柱建物群は前年度に報告している。

－平成16年度（49～50区）－

50区で奈良時代の溝が発見された。平成15年度に発見された大型の掘立柱建物群に関連する遺構として注目される。本書において50区溝として第4章で報告する。（竹中）



現地説明会（2002年11月3日午後）の様子
（32区竪穴住居跡を前に）



小学生（多比良小学校）による見学会（2002年11月6日）
（23～24区環濠を前に）



第2図 調査区配置図(1/2,000)

第2章 これまでの調査成果と採集資料の紹介

第1節 これまでの調査成果

十園遺跡では第2図にあるように圃場整備にかかわる調査区が50箇所設けられている。これまでの成果を時代別に簡単に紹介しておきたい。なお、以下に紹介するものは国見町教育委員会2004年発行の『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概要)第4集に掲載された内容が中心である。

旧石器時代(32区・33区)

32・33区において旧石器時代の遺物包含層が確認されている。剥片尖頭器・台形石器・ナイフ形石器などの製品が集中して出土している。また、同時代と思われるピット・柱穴も検出されている。また、この地点での火山灰分析や植物珪酸体分析も行われている。

縄文時代(22区・25区・32区)

32区において風倒木痕跡が発見され、覆土中から縄文時代早期の土器(平椀式)が4個体分出土している。この地点での火山灰分析と植物珪酸体分析も行われている。

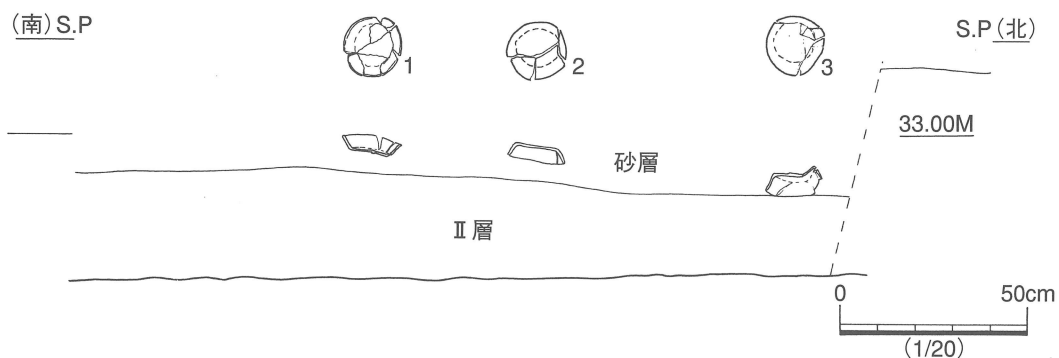
また、落とし穴状遺構が22区・25区で3基検出されている。検出面は基盤となる黄褐色粘質土層であり、覆土などから時期を決定できるような遺物の出土はなかったが、縄文時代のものと思われる。前記の32区検出の風倒木発見の早期土器群に近い年代を想定している。

弥生時代(3区・4区・5区・8区・22~24区・25~29区・12区・31~32区)

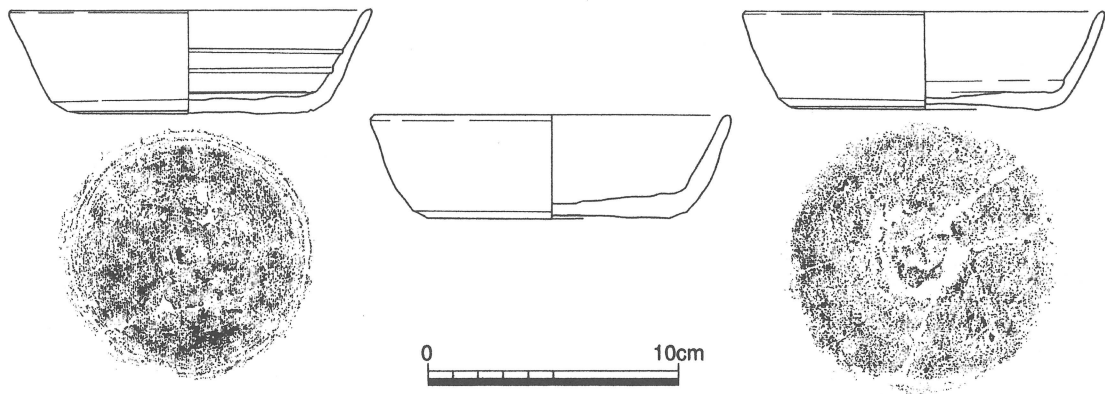
弥生時代の成果については、本書第3章(13p~60p)で報告するが各調査区での成果を簡単に紹介しておく。また、弥生時代の表面採集資料を本章第2節(8p~12p)で紹介していく。弥生時代に関連する遺構が発見された調査区は、3区・4区・5区・8区・22~24区・25~29区・12区・31~32区である。弥生時代中期の環濠・住居跡(円形2軒, 方形2軒), 弥生時代後期の環濠・住居跡(方形2軒)などが主なものである。特に32区検出の円形の住居跡は直径が12mほどの巨大なもので、立替えおよび拡張がなされたものである。また、4区検出の住居跡出土の土器群は赤色顔料が塗布された祭祀にかかわるものである。完全な形に近い状態まで復元できているものが多く、何らかの祭祀に利用されたものを住居跡状の落ち込みに廃棄したものであろう。

奈良・平安時代(12区・13区・14区・35区・47区・50区・C区)

奈良・平安時代については、47区で検出された大型の掘立柱建物群(第6図)が『肥前国風土記』に登場する高来郡衙関連の遺構として注目される。それらと出土品の時期などがほぼ一致する遺構は、本書第4章(61p~73p)で報告する50区溝, 35区旧河川で発見された祭祀遺構(第3図)である。35区で検出された祭祀遺構は、3個体の土器を一直線に河川際にならべるといものである。出土した土師器杯3点(第4図)は、35区で検出された旧河川の際に一直線に並べた状態で出土したものである。法量は3個体ともにほぼ共通するが、一点のみ高台を貼り付けていた痕跡が残る。

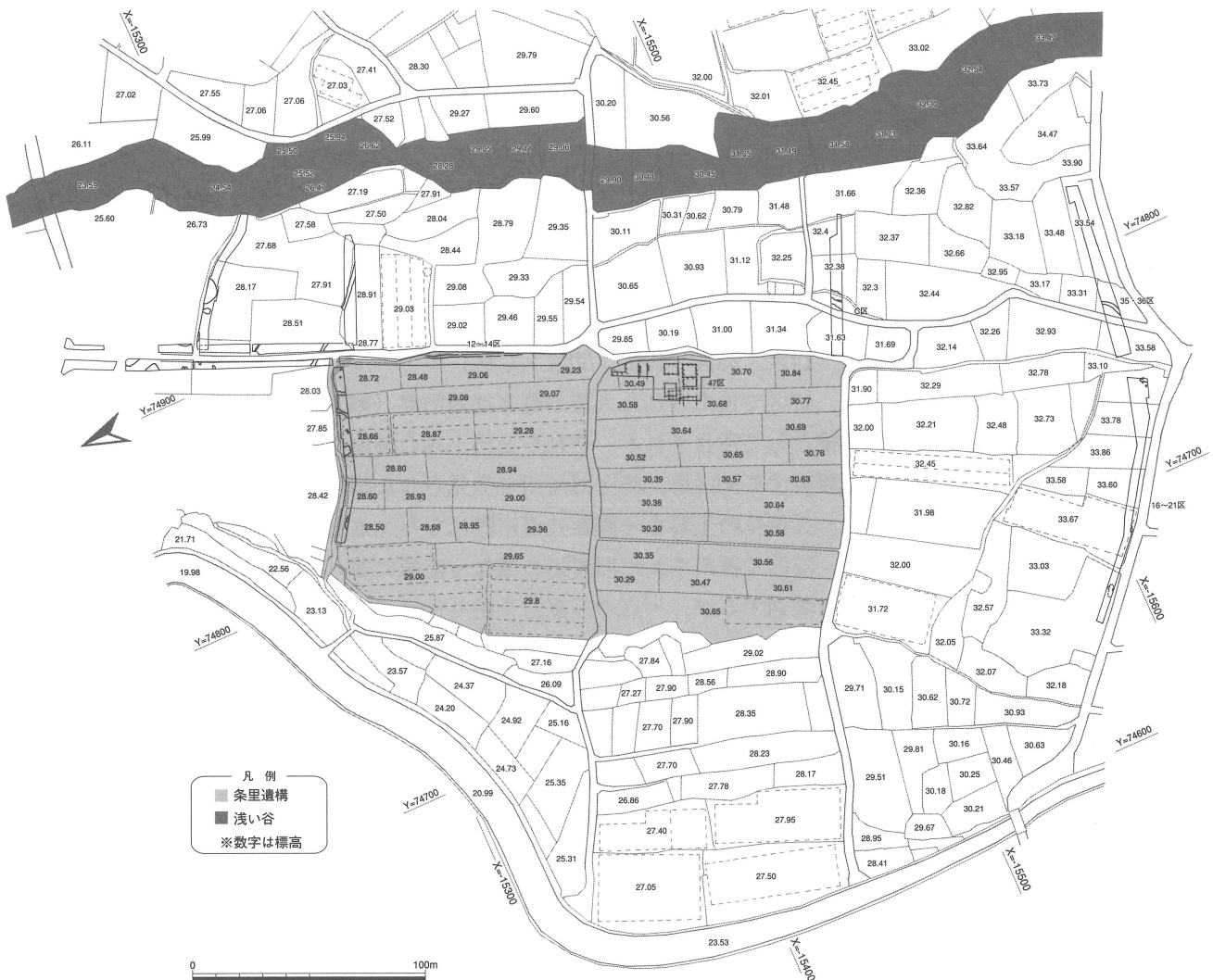


第3図 35区自然河川際での土器出土状況(1/20)

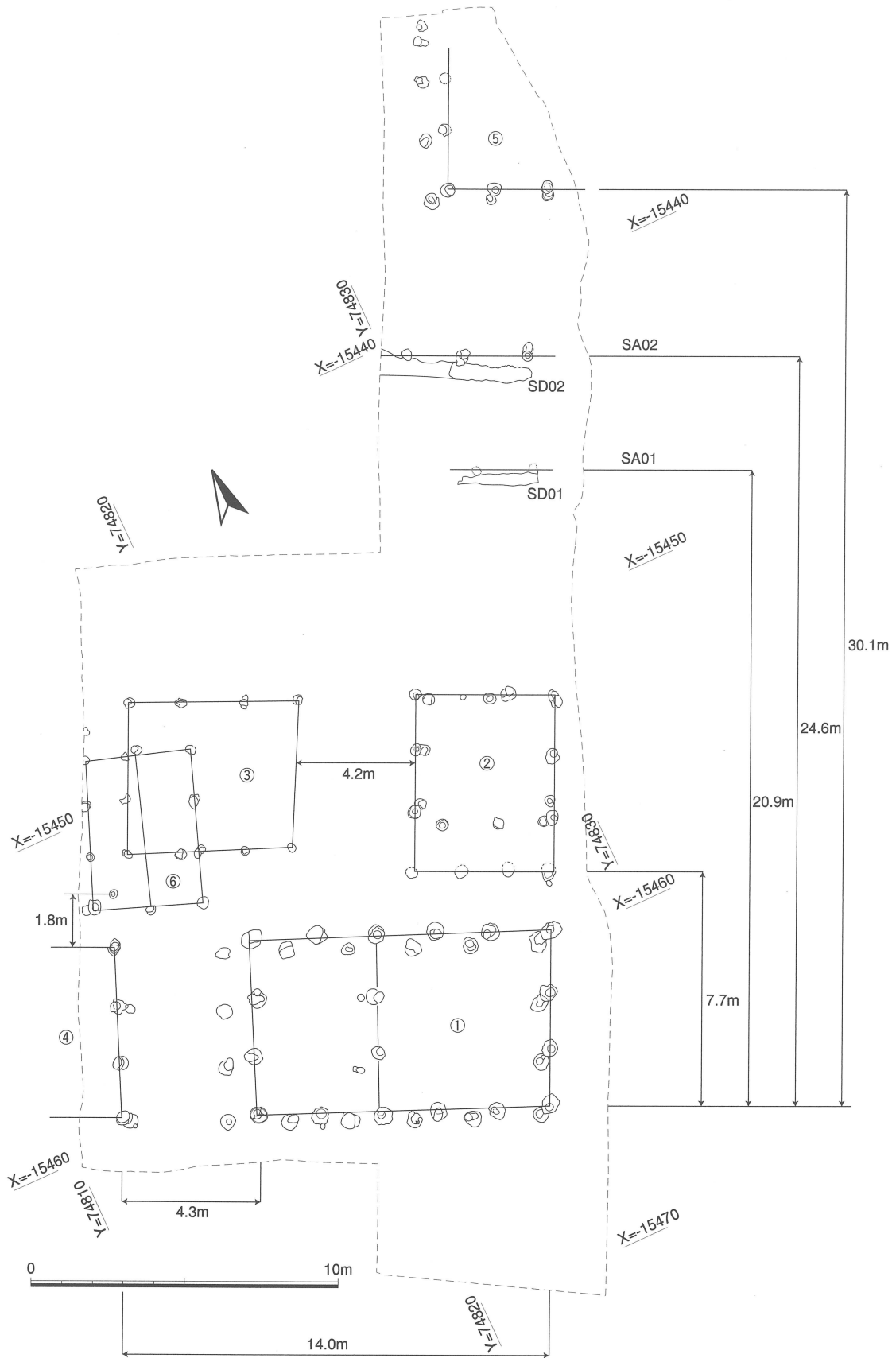


第4図 35区自然河川出土土器(1/3)

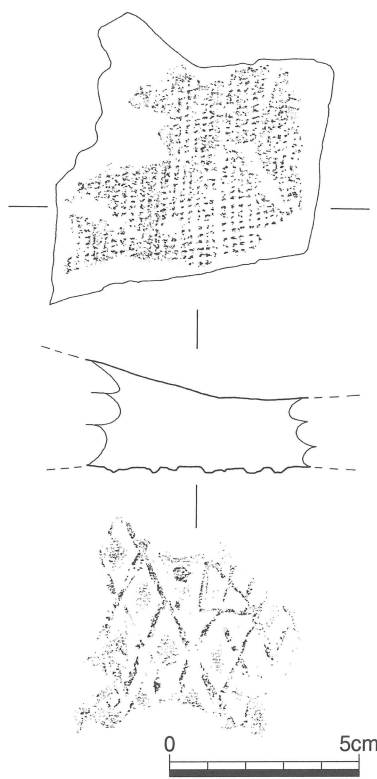
47区で発見された大型の掘立柱建物群は建物軸が周辺にみられる条里遺構（第5図）と一致しており、これらの建物のほかにも郡衙に関連する諸施設が集中して建造された可能性が高い。条里遺構は第5図にみるように2面確認できる。建物群は南側の条里内でも北東隅に近い部分での検出である。条里全体に建物群や関連施設が広がるのであれば、当時としては大規模な公共工事であったと思われる。また、区画や灌漑のための水路（50区溝）も検出されており条里遺構のこの範囲以外でも大規模な土地改良に関わる掘削工事がなされたものと考えられる。



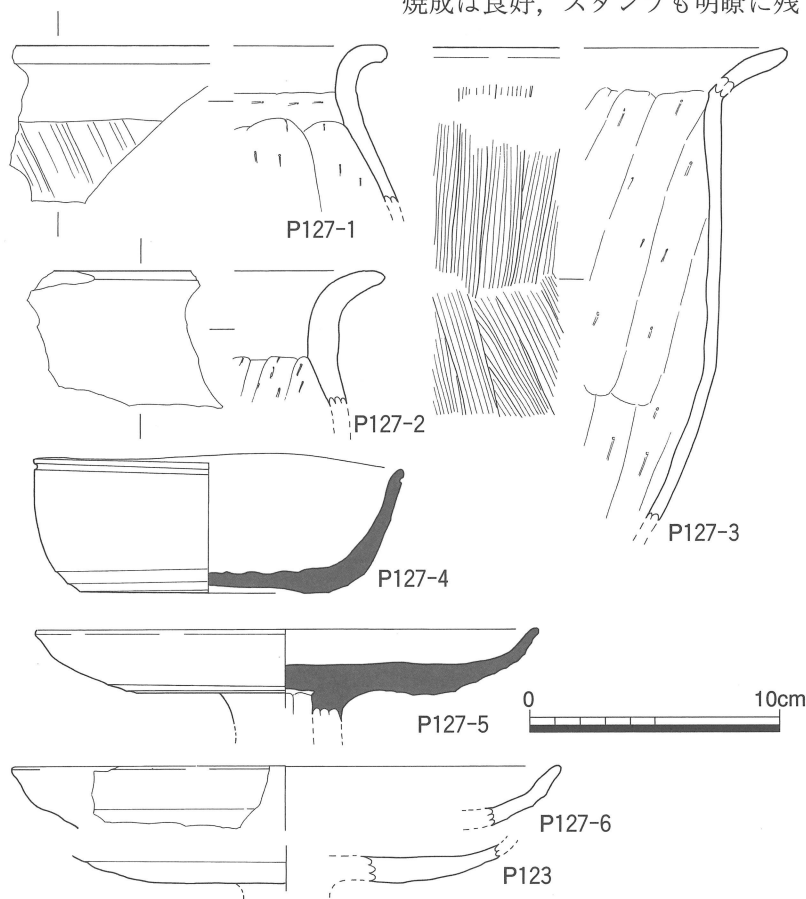
第5図 十園遺跡の条里遺構と検出遺構の配置図(1/1,500)



第6図 47区検出建物群・柵列(1/200)



第7図 50区出土瓦片実測図(1/2)



第8図 4号建物関連(P127柱抜き取り穴)出土土器(1/3)

発見された建物群はほぼ同じような規模で1回の建替えが行われていた。また、各柱は抜き取り穴を明瞭に残すものが多く、柱の直径は25cm程度に復元できる。もっとも大きな建物が5間3間(10.2m×5.7m)の東西主軸(第6図①)、そのすぐ西にはそれとほぼ同規模の建物(第6図④)の側柱列のみを検出している。この建物④の柱抜き取り穴の一つに土器(第8図)が廃棄されており、建物群の下限年代を決定できる資料となる。第6図①の建物の北側に、南北軸の3間四方(5.3m×4.35m)の②、その西に同じく3間四方(5.5m×4.9m)で東西軸の③があり、それらの北側に柵列二列(SA01・SA02)溝2条(SD01・SD02)があり、3間四方以上(5.7m×3.8m)の⑤がある。これら5軒の建物はほぼ方位を一致して建造されたものである。これらの建物群は、8世紀代の古代寺院と考えられる近隣の五万長者遺跡との関連が注目される。これらとは別に3間2間(4.9m×3.5m)の南北主軸の建物⑥があり、12・13・14区検出の溝と主軸が一致する。

第7図は50区で出土した古代瓦片である。50区の調査では攪乱層ではあるが、五万長者遺跡で採集されている瓦片にある叩き工具と同様な模様を持った瓦片が出土している。これは五万長者遺跡と十園遺跡との関連を強める資料である。平瓦片の一部と考えられる。焼成は良好、スタンプも明瞭に残り、胎土には角閃石を多量に、白色粒子も多く含む。(図版35)

第8図は建物④の柱の一つであるP127の柱抜き取り穴から出土している土器の実測図である。これらの遺物は有明町大野原遺跡(七反畑地区)で検出された7世紀末から8世紀前半代の土器が多量に出土している廃棄土坑の土器群と形態的に類似する点が多い。これらの土器群から建物群の下限年代は8世紀中ごろと考えておきたい。

さて、第4章で紹介する50区溝で検出された土器群は、形態的には類似する点が多く、建物と同様な時期設定が妥当かと思われる。詳細は第4章(61p~73p)および第5章第2節(83p~88p)に譲るが、建物群と同時期の溝と判断しておく。

C区溝は幅2.8m深さ60cmで、覆土は灰褐色砂を主体としている。覆土の中位から土師器坏と須恵器坏がそれぞれ一点ずつ出土している。いずれも半分強が残る資料であるが、一括に近い状態のものが溝に流れ込んだものであろう。

12・13・14区で検出された溝（水路）は検出延長約45mで、底面のレベル差がそれほどなく緩い傾斜で設計されている。地形に合わせる形で南から北に45mでおよそ50cm南に下がるという緩傾斜である。覆土には灰褐色砂を主体とするが、一気に埋まった様子ではなく長い時間をかけて自然に埋まったものと考えられる。掘削当初は常時水が流され、浚渫作業などが行われていたものと考えられる。47区建物群に関連する遺構として注目されるが、建物と方位が一致せず、出土遺物にも時期的なズレがあるため、それ以降の施設に関連するものと考えられる。12・13・14区検出の溝と方位の一致する建物は、47区検出の建物⑥である（第6図）。大型の掘立柱建物群が廃棄されたあとにも、何らかの施設が存在した可能性が高い。

第9図・第10図は12・13・14区溝から出土した石帯と土器である。石帯は黒い頁岩製であり、4cm四方で表面は磨かれ光沢を放つ。第10図の土師器坏は多量に同様な法量のものが出土している。しかし、器面調整や底部の仕上げ、器壁調整などの部分でいくつかのグループに分けることができる。前回の報告のまとめの部分では島原半島でのこの種の土器の整理を行っている。このほかに12・13・14区溝では須恵器（8世紀後半代から9世紀初頭）、黒色土器A類（9世紀後半～10世紀代）なども出土している。このため掘削年代と埋没年代には大きな開きがあるものと考えられる。この点については第5章であらためて整理し、奈良平安・時代の状況を復元していく。

第9図・第10図は12・13・14区溝から出土した石帯と土器である。石帯は黒い頁岩製であり、4cm四方で表面は磨かれ光沢を放つ。第10図の土師器坏は多量に同様な法量のものが出土している。しかし、器面調整や底部の仕上げ、器壁調整などの部分でいくつかのグループに分けることができる。前回の報告のまとめの部分では島原半島でのこの種の土器の整理を行っている。このほかに12・13・14区溝では須恵器（8世紀後半代から9世紀初頭）、黒色土器A類（9世紀後半～10世紀代）なども出土している。このため掘削年代と埋没年代には大きな開きがあるものと考えられる。この点については第5章であらためて整理し、奈良平安・時代の状況を復元していく。

室町・鎌倉時代（19区・21区）

19区と21区で製鉄関連遺構を検出している。21区検出のものは堅型の製鉄炉本体と廃滓場の一部が検出されている。19区では石組みの遺構で内部から鞆羽口が検出されている。いずれも年代を決定付けるような土器などは見つかっていないが、小片であるが土器があり、底面に糸切り痕の見えるものがあり、中世段階での操業と考えられる。

（竹中）

※図版出典

第7図は今回初めて掲載するもの。それ以外は2004国見町教育委員会編『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第4集から加筆転載している。

第3・4図：『十園遺跡』62p第49・50図

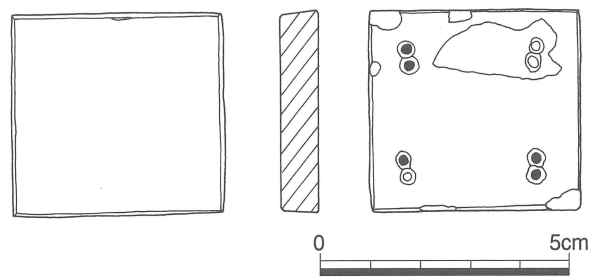
第5図：『十園遺跡』29～30p第20図

第6図：『十園遺跡』33p第23図

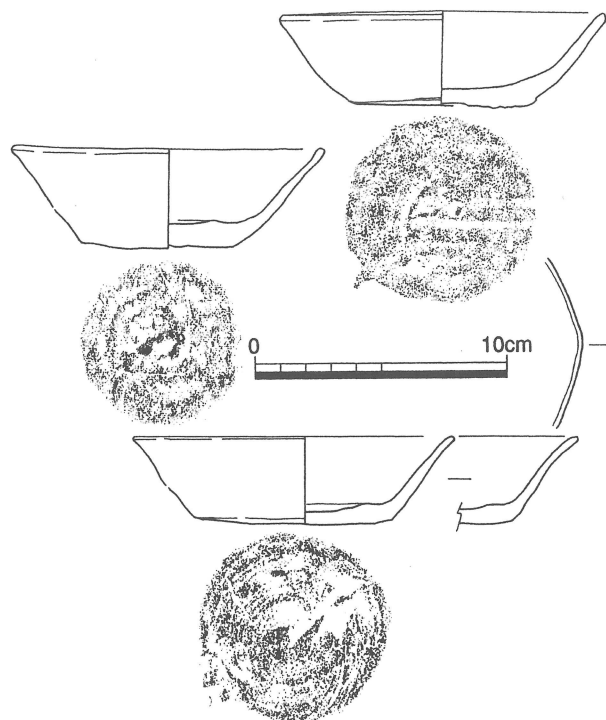
第8図：『十園遺跡』41p第29図

第9図：『十園遺跡』59p第45図

第10図：『十園遺跡』第31・32・33図より抜粋



第9図 12・13・14区 SD01出土石帯(2/3)



第10図 12・13・14区 SD01出土土器(1/3)

第2節 表面採集資料の紹介 (第11~14図 第1~3表 図版20)

第11図と第12図は圃場整備が行われる以前から調査にいたるまでの間に表面採集されていた弥生土器片の実測図である。調査中に採集したのも含めるとコンテナ1箱ほどの量がこれまでに採集されている。技法的な特徴、色調・胎土の詳細は観察表と実測図にゆずり、特色のみを簡単に紹介する。

弥生土器 (甕棺・生活什器) (第11図~第12図 第1~2表 図版20)

1~10までは本書13p 第15図の「甕棺片採集地」での採集資料である。甕棺の存在を裏付けるものとしては、4区SB01の西側で大型の甕棺が発見されたという話が地元に残っている。

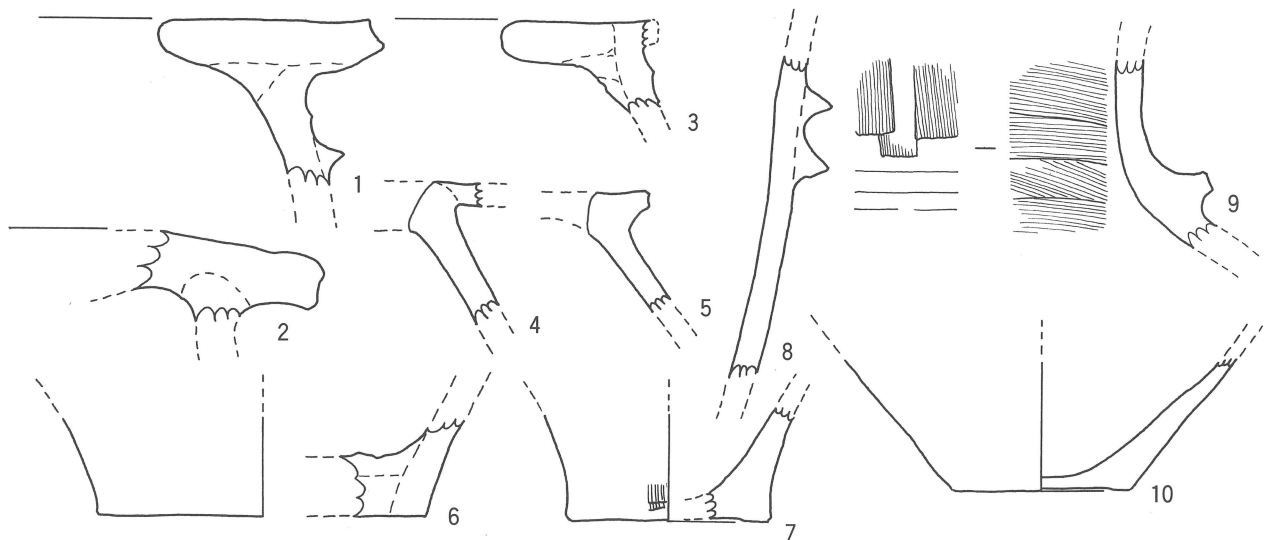
1~3は断面三角形の突帯をもつ甕棺口縁部片で、4~5は鋤先状口縁部をもつ甕棺片、8は2条の三角形突帯をもつ胴部片である。1の突帯部分の表面には赤色顔料が確認でき、突帯部分のみ胎土が胴部と異なり白く発色する生地が使われている。いずれも10cm台の破片資料であるため、直径などの復元は困難を極める。しかし、口縁部や突帯部分の大きさ、器壁の厚みなどを加味すると1・2そして8は高さが100cmを超える大型品の一部であることが容易に想像できる。また、3・4・5などは70cm前後の中型のものになるものと思われる。1・2はその形状から別個体である可能性が高く、断面に残る粘土紐の状況から3・4も別個体となるため、第11図に紹介した口縁部だけでも5個体分に復元することが可能となる。1・2が大型品で、3・4・5は中型品、それぞれの大きさに復元できる。

6~7は甕棺底部片である。須玖式の特徴を持つ。7は上げ底状となり底径が小さく小型の甕棺に、6は平底となり底径が大きく大型の甕棺にそれぞれ復元できる。いずれも火を受けた痕跡のみられない資料である。これらの底部片と合わせると図示したもので最大で7個体の甕棺が復元できる。

9は大型の壺頸部片である。胎土や色調、焼成などはいずれも1・2などの大型の甕棺片と共通する部分が多い。形態的には大型のものに復元でき、1・2などのように大型品としておきたい。甕棺墓の祭祀にかかわるものか、甕棺と同様に壺棺として利用されていたものであろう。10は壺底部片であり、底部は非常に薄く作られる。これも祭祀に用いられた可能性がある。この大型の壺も棺として利用されたと考え、第11図には8個体の土器棺が復元できる。

図示できなかった破片資料には、色調や胎土、器壁の厚み、形態的特徴から複数個体存在することが容易に判断でき、採集地点一帯には甕棺墓群が営まれていた可能性が高い。地元では大型の甕棺が発見されたという話も残り、表面採集された土器片はその話を裏付けるものとしても価値がある。

第12図の11以下は甕棺墓群に関連するものではなく、日常什器となるものを図化している。

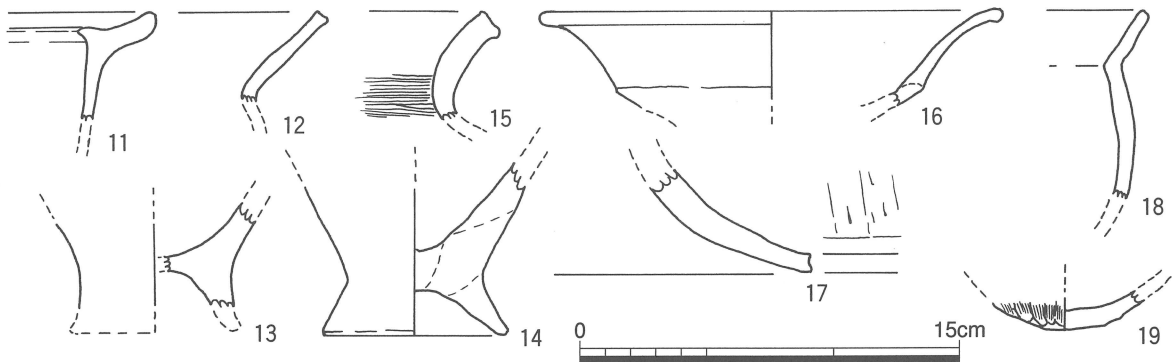


第11図 表面採集資料①(1/3)

11は甕の口縁部片で外に張り出す口縁端部と内側に張り出す突帯が特徴的な資料である。外面には煤の付着が確認できる。外に張り出す口縁端部は外側に厚く丸く作られる点が特徴的である。12は甕の口縁部片で、外側に張り出すだけの単純な形態である。これにも外面には煤が付着する。復元される口縁部直径から、法量的には11とさほど差のないもので、高さ30~40cm程度の煮炊きに利用された甕に復元できる。

13・14は甕の脚部片で、13は裾の張り出しが弱く、14は張り出しが強い。被熱により赤く変色する部分もみられる。これらも11や12同様に煮炊きに利用されたものである可能性が高い。全体的な形態の復元を試みると、11と13とを対応させ、いわゆる中期黒髪段階の甕に、12と14とを対応させ後期の脚台付の甕にそれぞれ復元できる。

15は壺の口縁部片で、頸部内面に横方向の刷毛調整が施される。16は高坏の坏部片で、口縁端部は丸く作られ水平に外反している。坏部中位の稜線は比較的明瞭である。17は器台の裾端部片であり、裾広りの筒型に復元できる。18は鉢の口縁部から胴部中位の破片である。外面には黒斑が確認できる。19は鉢の丸底の底部片で、外面には丁寧な刷毛調整が見られる。



第12図 表面採集資料②(1/3)

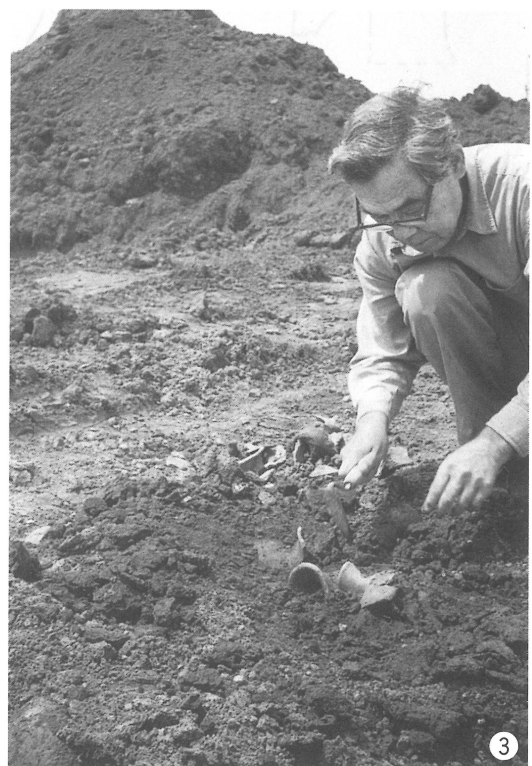
第1表 表面採集資料①出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法の特徴	胎土/色調	備考
11	1	弥生土器 甕棺(大型)	口縁部直径80以上	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子, 石英, 雲母粒 外面: 橙 (Hue2.5YR7/8) 内面: 灰黄褐 (Hue10YR6/2)	焼成良好 突帯に 赤色顔料
			残存高 6.5			
	2	弥生土器 甕棺(大型)	残存高 3.4	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子, 石英, 雲母粒 外面: 橙 (Hue2.5YR7/8) 内面: 灰黄褐 (Hue10YR6/2)	
	3	弥生土器 甕棺(中型)	残存高 3.6	内外 口縁部: 丁寧な横ナデ 面 胴部: 凹凸残す強いナデ	雲母, 石英粒子, 白色粒子 橙 (Hue2.5YR6/6, 7/6)	
	4	弥生土器 甕棺(小型)	残存高 5.5	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子, 石英, 雲母粒 外面: にぶい橙 (Hue7.5YR) 内面: 灰黄褐 (Hue10YR6/2)	
	5	弥生土器 甕棺(小型)	残存高 4.7	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子, 石英, 雲母粒 外面: 橙 (Hue2.5YR6/6) 内面: 灰黄褐 (Hue10YR6/2)	
6	弥生土器 甕棺(底部)	底径復元径 13	外面 丁寧なナデ 内面 凹凸残すナデ仕上げ	雲母・白色粒子, 石英粒多い 浅黄橙 (Hue10YR8/3, 8/4)	黒斑	
		残存高 4.8				
7	弥生土器 甕	底径復元径 8	外面 縦刷毛 内面 ナデ	石英, 白色粒子 外面: にぶい黄橙 (Hue10YR7/2)~ 橙 (Hue2.5YR7/8) 内面: 灰 (N4/)		
		残存高 4.5				
8	弥生土器 甕棺(大型)	残存高 12.6	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子, 石英, 雲母粒 外面: 橙 (Hue2.5YR7/8) 内面: 灰黄褐 (Hue10YR6/2)		
9	弥生土器 壺型棺 (大型)	突帯部直径 (復元径) 54	外面 縦刷毛 内面 横刷毛	角閃石・白色粒子多い, 赤色粒子 外面: 浅黄橙 (Hue10YR8/4) 内面: 橙 (Hue2.5YR6/8)		
		残存高 7.5				
10	弥生土器 壺	底径 7	外面 ナデ 内面 ナデ	角閃石, 石英, 雲母・白色粒子 外面: 浅黄橙 (Hue10YR8/3, 8/4) 内面: 黒褐		
		残存高 5.2				

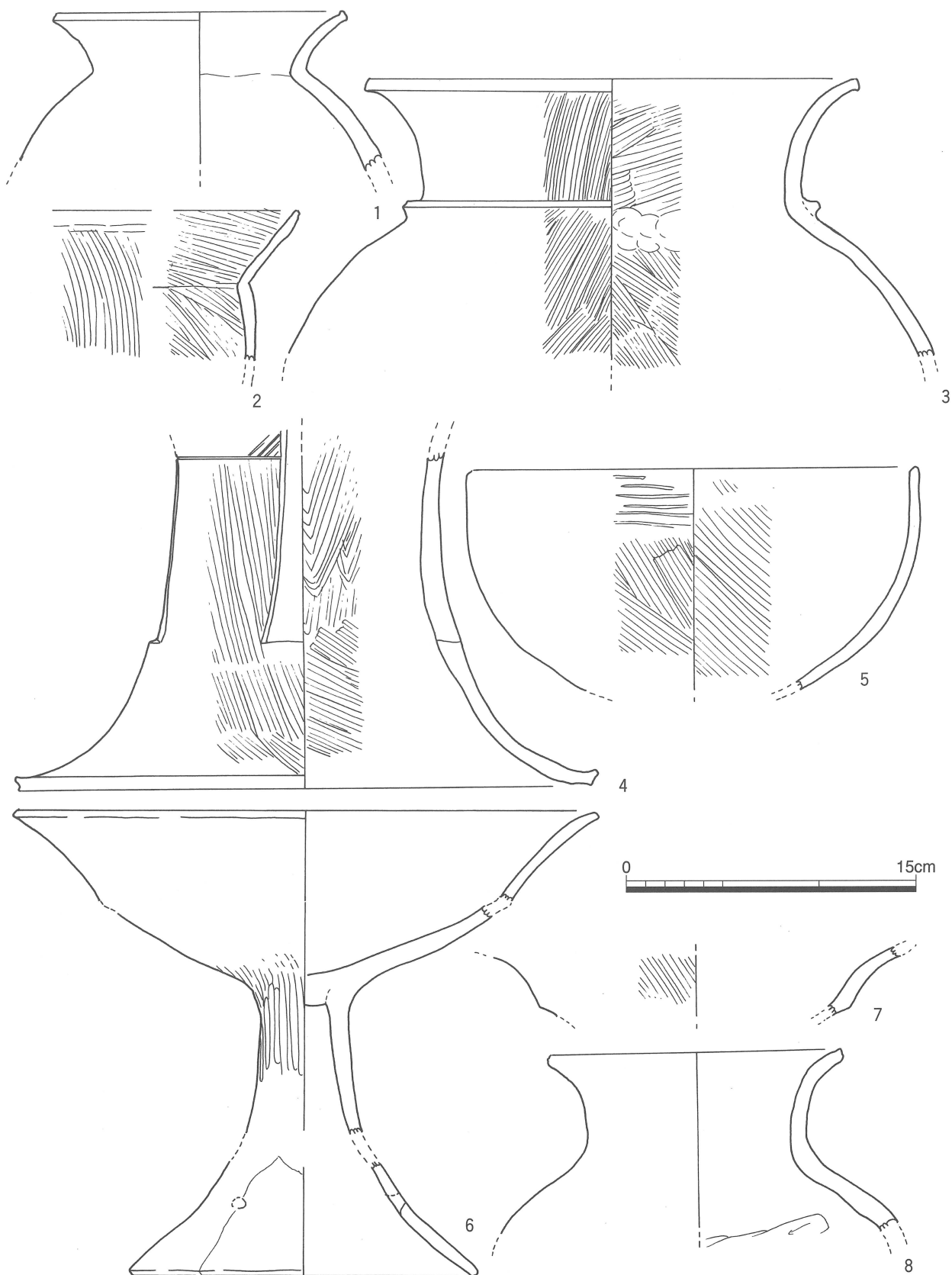
第2表 表面採集資料②出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考	
12	11	弥生土器 甕 (煮沸用)	口縁部直径 (復元径)	25	外面 横ナデ	角閃石・雲母粒子多い 浅黄橙 (Hue10YR8/3)	
			残存高	4.3	内面 横ナデ	灰黄褐 (Hue10YR5/2)	
	12	弥生土器 甕	口縁部直径	24	外面 ナデ	角閃石, 白色粒子, 石英, 雲母, 赤色砂	
			残存高	3.5	内面 ナデ	明赤褐 (Hue2.5YR5/6)	
	13	弥生土器 甕(底部)	底径	6~6.5	外面 ナデ	雲母, 赤色砂, 白色粒子	
			残存高	4.2	内面 ナデ	にぶい橙 (Hue5YR7/4~7/3)	
	14	弥生土器 甕(台付) (脚部)	底径	8.4	外面 ナデ	角閃石, 白色粒子, 雲母粒, 赤色砂	
			残存高	6.9	内面 ナデ	橙 (Hue7.5YR7/6)	
	15	弥生土器 壺	口縁部直径	20	外面 ナデ	白色粒子, 石英, 雲母多い	
			残存高	4.2	内面 横刷毛	浅黄橙 (Hue7.5YR8/4)	
	16	弥生土器 高坏	口縁部直径 (復元径)	18	外面 赤色顔料	角閃石, 赤色砂, 白色粒子	
			残存高	3.8	内面 赤色顔料	浅黄橙 (Hue10YR8/3, 8/4)	
	17	弥生土器 器台	底径復元径	26	外面 刷毛(ケズリ), 横ナデ	角閃石, 白色粒子, 石英, 雲母	
			残存高	4.1	内面 丁寧なナデ	明褐 (Hue5YR5/6・5/8)	
	18	弥生土器 鉢(小型)	残存高	7.4	外面 横ナデ	角閃石, 白色粒子, 雲母	黒斑
					内面 横ナデ	橙 (Hue5YR6/6)	
	19	弥生土器 鉢もしくは 甕底部	残存高	1.6	外面 刷毛 ケズリ	角閃石多い, 白色粒子, 赤色砂	黒斑
					内面 ナデ	浅黄橙 (Hue10YR)	

第13図は甕棺採集地点の圃場整備工事中に地元郷土史会の有志の手により採集されたものである。写真①~③は採集当時の様子である。写真①は採集された土器片が集められたもの、写真②は土器片が土中に入っている様子、写真③は土器片を掘り出している様子である。写真②では土器がはいりこんでいる部分の土が黒くなっており、炭化材なども確認できるため、なんらかの遺構に入り込んでい



①表面採集された土器片の一部
②表面に露出した土器片
③表面採集の様子



第13図 表面採集資料③(1/3)

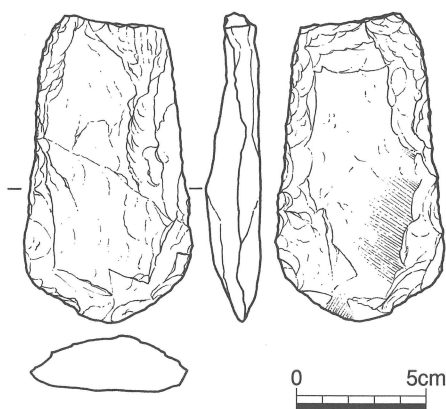
たものが採集されたものと思われる。大型の破片資料が多く（第13図・図版20），完全な形のもものが環濠あるいは住居跡などに投げ込まれたような状態と考えておきたい。さらに写真にある土器片をみると，胴部に断面台形の2条の突帯をもつ胴部片（突帯表面に刻みを入れるのは特徴的），外面

第3表 表面採集資料③出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法の特徴	胎土/色調	備考
13	1	弥生土器 壺	口縁部直径 (復元径) 15 残存高 3.2	外面 縦刷毛の上にナデ仕上げ 内面 上半:横ナデ 下半:ケズリ+ナデ仕上げ	角閃石, 雲母, 石英, 白色粒子, 赤色砂 橙 (Hue5YR6/6)	
	2	弥生土器 甕	口縁部直径 (復元径) 23 残存高 7.7	外面 斜位刷毛 内面 斜位刷毛	角閃石多い, 白色粒子, 赤色砂 にぶい黄橙 (Hue10YR7/3)	
	3	弥生土器 壺	口縁部直径25~27 残存高 7	外面 縦刷毛 内面 斜位刷毛 突帯部:指頭オサエ	角閃石・雲母粒多い, 石英, 白色砂 外面:にぶい橙 (Hue5YR7/4~7/3) 内面:明赤褐 (Hue5YR5/6~5/8)	
	4	弥生土器 筒形器台	底裾直径 30 残存高 18.3	外面 縦刷毛 内面 斜位刷毛	角閃石, 白色粒子, 赤色砂, 石英 橙 (Hue5YR6/6)	
	5	弥生土器 鉢	口縁部直径 (復元径) 23 残存高 11.4	外面 口縁部:刷毛調整後横ナデ 胴部:斜位刷毛+横ナデ 内面 口縁部:刷毛調整後横ナデ 胴部:斜位刷毛	角閃石, 雲母, 石英粒子, 白色粒子 にぶい橙 (Hue5YR7/4)	
	6	弥生土器 高坏	口縁部直径 (復元径) 30 器高 24	外面 ミガキ 内面 ナデ	赤色砂, 雲母, 白色粒子 橙 (Hue2.5YR)	
	7	弥生土器 高坏	頸部径 16 残存高 3.5	外面 斜位刷毛 内面 ナデ	角閃石, 雲母粒子, 石英, 赤色砂 黄橙 (Hue10YR7/8)	
	8	弥生土器 壺	口縁部直径 (復元径) 15.2 残存高 5.5	外面 口縁部:横ナデ 頸部:縦ナデ 胴部:ナデ 内面 口縁部:横ナデ 胴部:指頭オサエ, ケズリあり	角閃石, 雲母, 赤色砂, 石英, 白色粒子 にぶい黄橙	

に叩き工具の痕跡をもつ甕胴部片、甕の脚部2~3点、そのほか丁寧なナデ調整仕上げの胴部片などがある。これらには第3章で報告する遺構出土品中に類似する資料がみられる。これらの土器が発見された地点(本書13p第15図「甕棺片採集地」周辺)まで、今回報告する環濠集落の一部は確実に広がることを物語る資料である。

第13図1は壺口縁部から胴部上位までの破片資料である。口縁部は上につまみあげており断面は方形となる。2は脚台付甕の口縁部片と思われる。口縁部がまっすぐ広がる点が特徴的で、頸部径と胴部最大径がそれほど変わらない形態に復元できる。3は壺の胴部から上の破片資料である。頸部に断面三角形の突帯を1条めぐらし、内外面ともに刷毛調整が丁寧に施されている。器壁が厚く作られている点が特徴的である。4は筒型器台の下半分の破片資料である。透かし穴は長方形のものを4つ、ほぼ4等分の位置に切り抜いている。5は鉢であり、底部を欠く破片資料である。口縁部外面に横位の深い刷毛調整が入るのが特徴的である。内外面ともに斜め方向の刷毛調整である。6は高坏の復元実側資料である。全高は24cm、脚部は比較的広がりを抑えた開き具合で、坏部は深みがあり直径が広い形態となる。内外面ともに丁寧なナデ調整で、脚部上位外面にミガキ調整がみられる。脚部裾には丸い穿孔があり三等分の位置に復元できる。7も高坏であるが、こちらは小型の部類で坏部の屈曲が強く、口縁部が水平に広がる形態である。外面に斜め方向の刷毛調整が施されている。8は壺の口縁部から胴部上位にかけての資料である。口縁部端部が1と同じように上につまみあげられた仕上がりとなる。頸部と胴部の境は不明瞭である。



第14図 表面採集資料④(1/3)

石器(第14図)

扁平打製石斧であり、柄の部分は折れている。安産岩製で長さ12.15cm、幅6.7cm、厚さ2.2cm、重量232.8g。刃部は鈍角であるが蛤刃状というよりも先端が尖るようにつくられる。環濠や墓坑の掘削、畑地耕作などに利用された掘道具であろう。

第3章 弥生時代の環濠と住居跡

第1節 環濠集落の検出 (第2・15図 図版2～19)

環濠4条と住居跡6軒・掘立柱建物1軒が検出されており、中期、後期の環濠集落が確認できた。各遺構の属する大まかな時期は、以下のとおりである。

中期の環濠集落に属する遺構 (第15図)

住居跡 4軒 4区SB02・01, 32区SB01・02

環濠 1条 23・24区SD01, 12区SD03

後期の環濠集落に属する遺構 (第15図)

住居跡 3軒 27区SB01・02, 29区SB02

環濠 3条 26区SD01. 02, 12区SD03



第15図 弥生時代の主な遺構の配置図(1/1,500)

中期の環濠と住居跡（本章 第2節）

3区・5区と23・24区で検出された環濠は、断面V字深さ1.2m、検出幅1.5mほどで、検出総延長は約50mである。底面のレベル差は西側が低くなっており、遺跡ののる丘陵を南北二つに切断するように東西方向に長く検出されている。

住居跡は4区で方形の竪穴住居跡が2軒、32区で円形の竪穴住居跡が1軒、33区で円形の竪穴住居跡が1軒、合計4軒が発見されている。方形のものは1辺が4.5m、円形のものは特に大きく、二軒とも直径が10mを超え、32区で発見されたものは12m強に復元される。

中期の環濠集落のおおよその範囲は、32区SB01を中心とする半径60mの円内におさまると考えておきたい。

第2章第2節（8p第11図）で紹介した表面採集資料や遺構出土品の中には大型の甕棺片（須玖式）も含まれており、その散布範囲から、中期には第15図の「甕棺片採集地」周辺が墓域として整備されていたものと考えられる。また、工事中に採集された土器片（第13図）には、中期から後期の年代が想定され、採集地点には甕棺墓群と環濠集落の一部が重なって存在することが想定できる。同様な大型の甕棺片は後述する27区SB01や26区SD01・02などの覆土中にも含まれており、後期に属する環濠はこれらの甕棺墓群を切るようにして営まれたものと考えられる。

後期の環濠と住居跡（本章 第3節）

環濠は26区で検出された断面V字の2条（SD01・SD02）で、覆土中に弥生時代後期から古墳時代初頭に属する土器を大量に含んでいた。

住居跡は29区で検出された平面方形の竪穴住居跡（SB02）と、古墳時代初頭の住居跡は27区で検出された隅丸方形の竪穴住居跡（SB01）である。その周辺から掘立柱建物（27区SB02）、土坑墓・土坑（27区SK01・29区SX01・29区SX02）などが発見されている。

後期の環濠集落のおおよその範囲は、復元が難しい。しかし、26区SD01・02が掘削された方向性は、中期の環濠を北側まで広げたという考え方もできる。そうであるならば、十園遺跡全体の北側半分以後期の環濠集落が広がっていると考えられる。

第2節 弥生時代中期の環濠と住居跡（第16図～第29図 図版2～13・21～22）

弥生時代中期に属する環濠と住居跡を簡単に紹介していく。環濠は3区・5区と23・24区とでそれぞれ検出されているが、平面的に延長線上で接合できるため1条の環濠として紹介する。

住居跡は平面形態が方形のものと円形のものと二種が検出されており、以下に環濠と住居跡をそれぞれ個別に簡単に紹介していく。

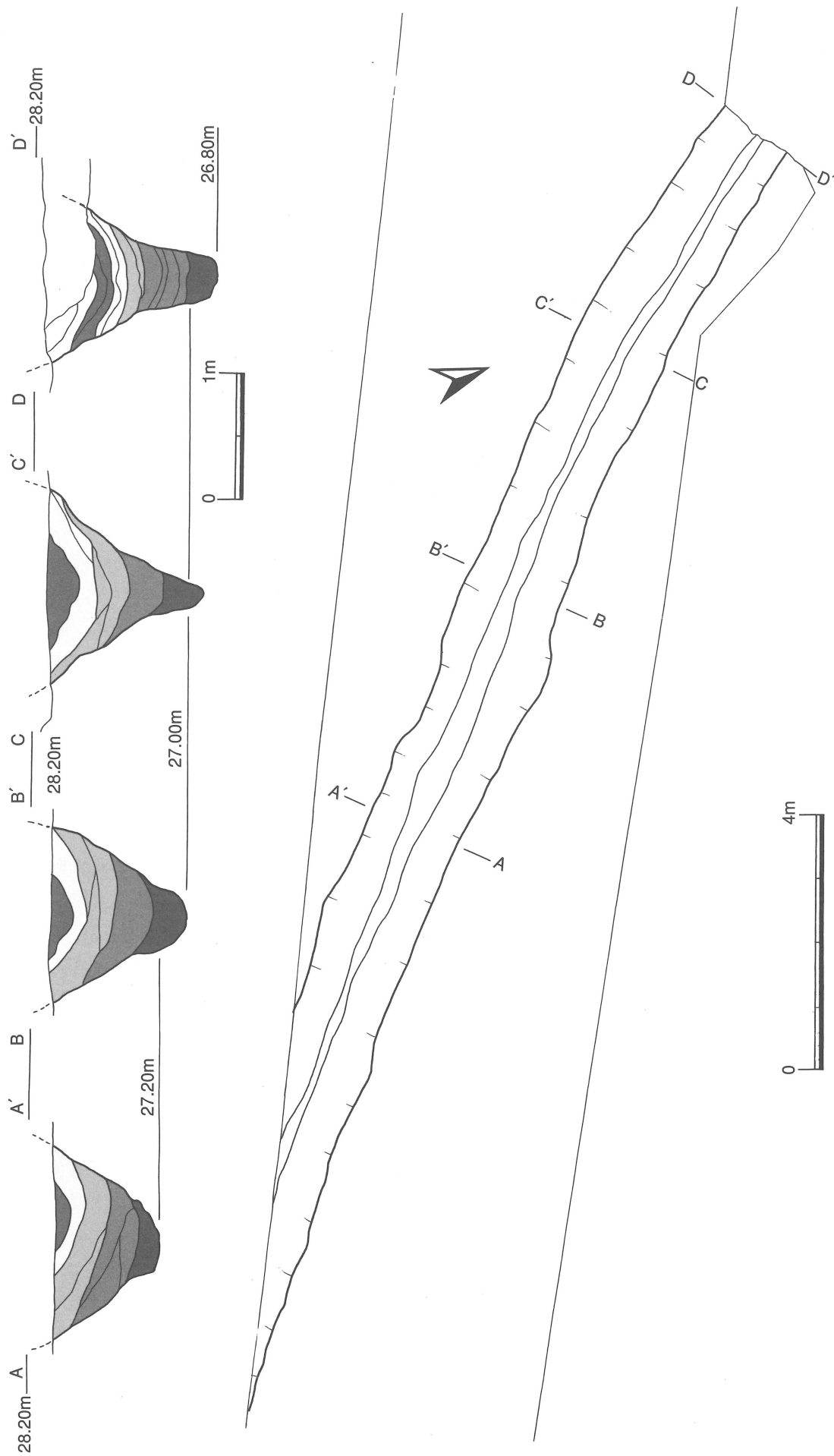
環濠（3区・5区SD01, 23・24区SD01 第16・17図 図版2～3・7～9）

環濠は3区から24区にかけての総延長約50mまで確認された。舌状に北へ伸びる丘陵を横切るようにして濠が掘られており、調査区外の東西方向に続くものと思われる。丘陵の西側はすぐ土黒川に接し、東側は小谷が走り、東西方向はいずれも自然地形によりある程度断絶された地形的環境となる。丘陵上部平坦面と土黒川との比高差が約9m、東側の小谷との比高差は約2.5mとなる。（第15図 図版2～3）

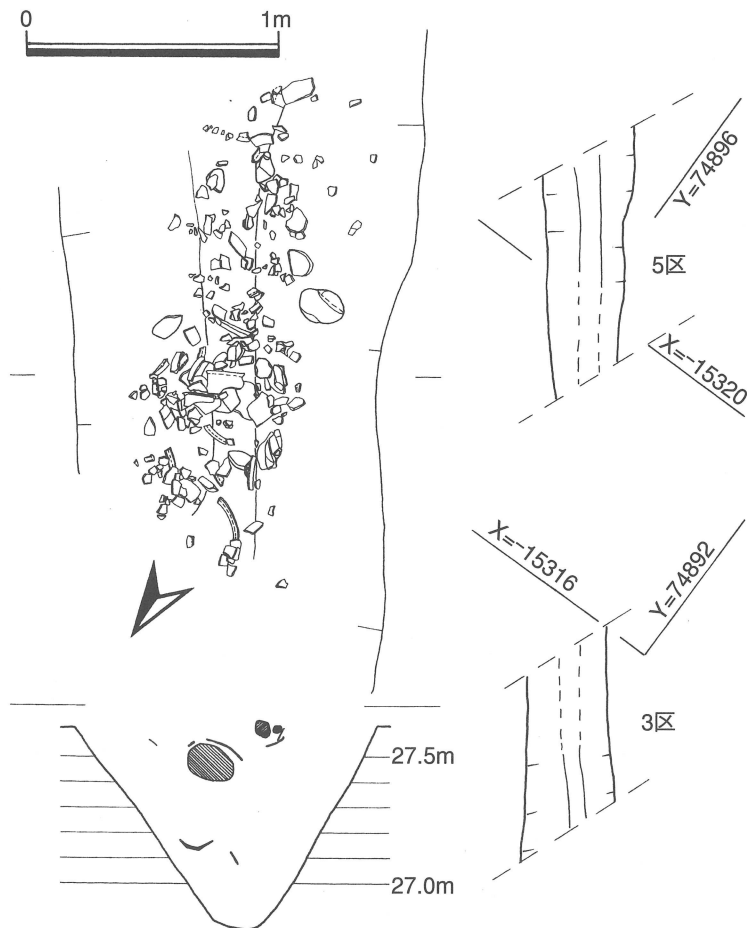
環濠の断面形は第16図や第17図にみるようにいわゆる「V」字であるが、中位までは傾斜が緩く、それ以下は垂直となる部分もあり、中位までとそれ以下とは意図的に掘り方を変えている。

環濠際から約2～3mの範囲には柱穴や竪穴住居跡は検出されなかった。（第15・16図）

遺構覆土は大きく4層に分かれ、第16図にみるように23・24区SD01のD-D'セクションでは12～13層に細かく観察でき、黒褐色土層が5枚ほど確認できる。いずれの断面においても腐植土を中心と



第16図 23区 SD01セクション図(1/45)・平面図(1/90)



第17図 5区 SD01 (1/30)

する黒褐色土層の上に遺物を含む褐色土層がある。その互層関係が4枚確認できるため大まかに4層に分けることとした。遺物の出土状態はその黒褐色土層にのる状態で炭化材や弥生土器片が出土しており、出土位置は濠の中心線上に集中する。特に炭化材などは濠と軸を合わせて出土している。(図版7) 濠の壁際に密着した状態での出土はほとんどなかった。出土土器のほとんどは表面や割れ口が摩滅している。

濠底面のレベルは第16図23・24区 SD01セクション図にあるように北西側が低く、その西側延長に当たる第17図の3・5区 SD01でも同様なレベルとなる。底レベル差は調査区内の東側と西側では50cmほどで、調査時に雨後数日が経過しても西側はなかなか水が引かない様子も確認できた。(図版9)

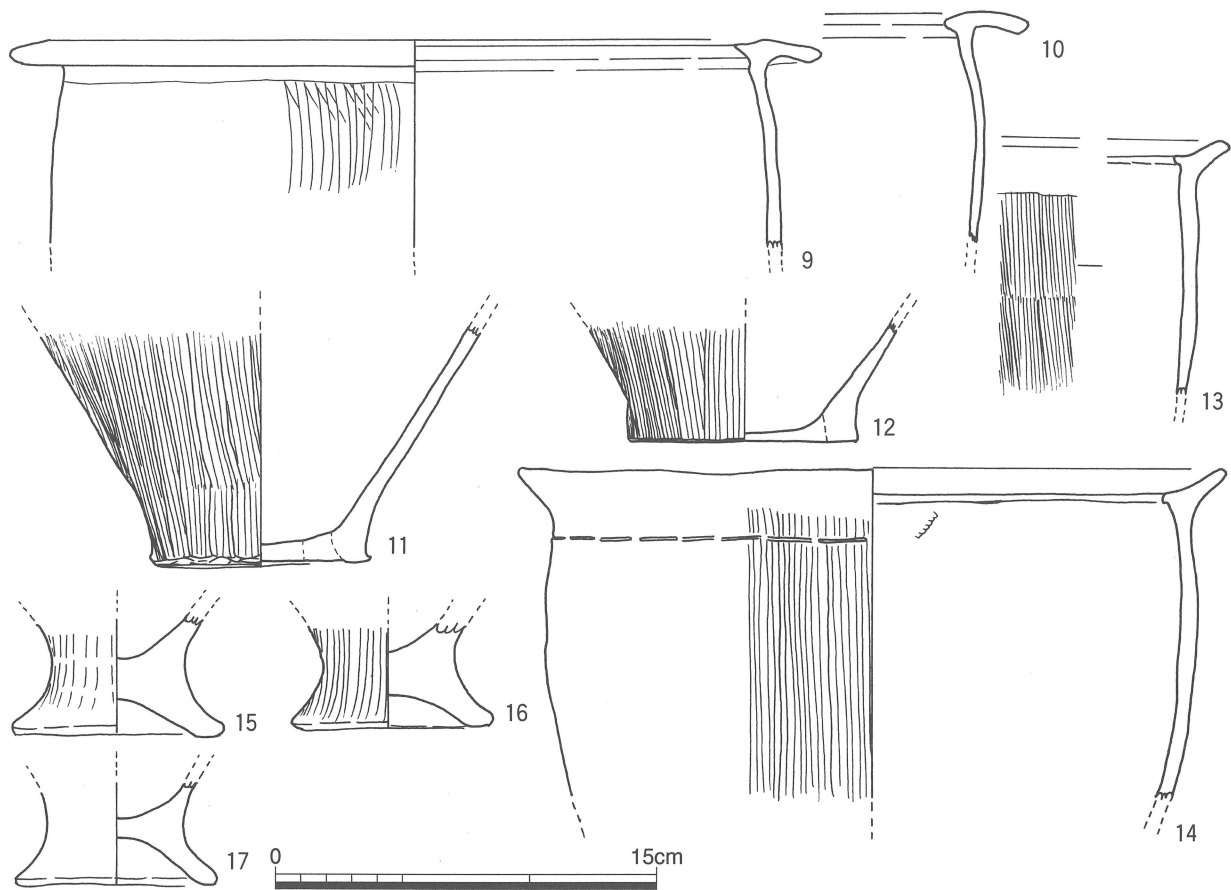
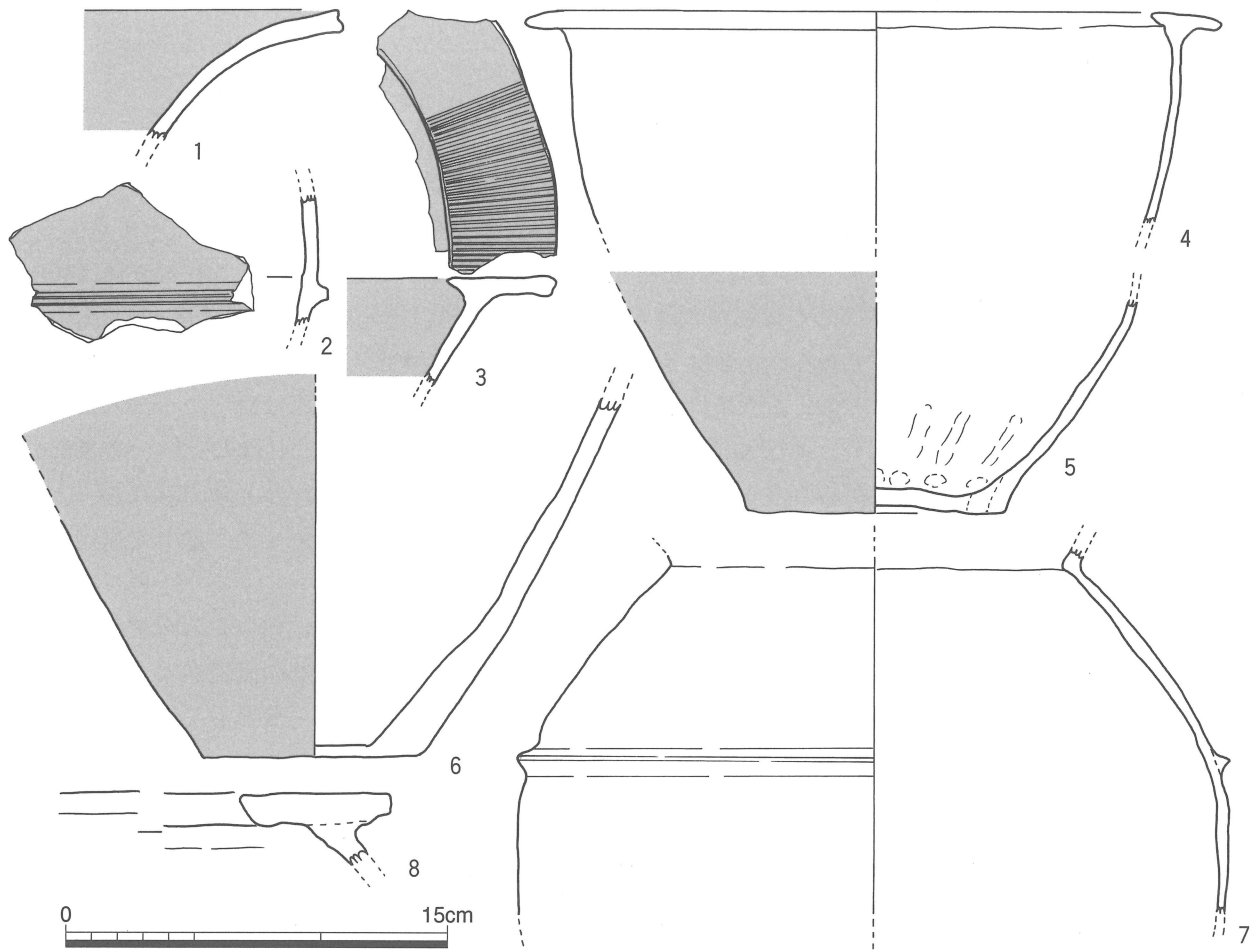
遺物の出土は環濠の底面直上で

は見られず、ある程度覆土が堆積してから、表面の摩滅の激しい土器片が黒褐色土層の上で多数出土している。完全な形の土器はなく、接合作業などを行っても、全周するまでに復元できる資料はないため、あらかじめ破片となっていた土器片などが、覆土中に投げ込まれたものである。家屋の構造材などの廃材も同時に入れ込まれたと考えられる。

以上のような状況から当遺構は、比較的長い時間をかけて自然に埋没していったものと考えられる。自然に埋没していく途中で以下に紹介する土器片を含んだ土砂が複数回入り込む、あるいは投げ込まれ、炭化材が生成されるような行為が行われたものと考えられる。

環濠出土土器 (23・24区 SD01出土品 第18図 第4表 図版21)

環濠から出土している土器の一部を紹介しておく。調査段階から予測されていたが、洗浄・接合作業を行う中でも、完全な形に復元できる資料は皆無であった。甕などの口縁部でも全周するまでに接合できるものはなく、甕底部片でも全周する資料は少ない。このような破片の状況は、遺構覆土出土品の状態として特徴的な点であり、環濠内に廃棄という目的で完全な形で投げ込まれた土器はなかったと考えられる。紹介する土器片は、破片の状態で環濠内に投げ込まれたと考えておきたい。中期の住居跡と思われる4区 SB02 (図版13) や後期の環濠となる26区 SD01・02 (図版15) などでの土器片の破片自体の大きさと対照的に、比較的小さな破片の出土が多く、出土する状態もまばらで極端に集中する部分はみられない (図版7)。後期の環濠や完全な形で投げ込まれた状態とは明らかに異なる出土状態であり、自然に濠が埋まっていく中で土器の破片や木材などを投げ込んだものと考えられる。破片の大きさは10cm四方のものがほとんど、6のみは高さ20cmほどの底部の全周する資料である。



第18図 23・24区 SD01出土土器(1/3)

炭化材は30~50cm程度のものが出土している。

第18図1~7までは外面あるいは内面にまで赤色顔料の塗布がなされた土器を図化している。9~17は甕の口縁部片と底部片であり、13と14の表面には煤が付着している。

1は広口壺口縁部片、内外面に赤色顔料の塗布がみられる破片資料である。復元される直径は40cmほどで、端部外面は「M」字状にくぼみがつけられている。器形の復元を行えば、4区SB02出土品(第29図1)と類似するものであろう。2はその胴部もしくは甕の胴部と考えられる。断面台形の突帯が貼り付けられ、外面には丹念に赤色顔料が厚く塗布されている。突帯上面はM字にくぼみがつけられている。突帯は高さがあり、4区SB02出土品などよりも高いが、幅はそれほどない。突帯部分での復元直径が22cm以上で、胴部の張りが弱い。やはり壺ではなく甕の胴部片かと考えられる。

3は高坏の口縁部片であり、口縁部上面に暗文が施されている。暗文は全周せず、途中で途切れている。口縁部直径は30cm、内外面には丁寧に赤色顔料の塗布が確認できる。

4・5は同一個体と思われる甕の破片資料である。胎土・調整・焼成ともに類似する点が多い。底部内面は指頭による強い圧痕が確認できる。口縁部の復元直径に対して、底部の直径が大きくなるため、同一個体となるかは疑問が残るが、同一個体として考えておきたい。4・5ともに表面の摩滅の激しい資料であるが、5の外面には赤色顔料の塗布が確認される。

第4表 23・24区SD01出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法の特徴	胎土/色調	備考
18	1	弥生土器 壺(広口)	口縁部直径 約40 残存高 5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	石英, 白色粒子, 雲母 橙(Hue5YR7/6)	赤色顔料
	2	弥生土器 甕	胴部復元径22以上 残存高 5	外面 赤色顔料 内面 横ナデ	角閃石, 黒・白・赤色粒子 外面:赤褐(Hue2.5YR4/6) 内面:にぶい橙(Hue7.5YR7/4)	
	3	弥生土器 高坏	口縁部直径 30 残存高 4.2	外面 赤色顔料 内面 赤色顔料	雲母・白・赤色粒子多い, 石英 橙(Hue5YR7/6)	
	4	弥生土器 甕	口縁部直径 27 残存高 8.5	外面 刷毛後ナデ 内面 ナデ	雲母, 石英, 白色粒子多い 橙(Hue2.5YR6/8)	
	5	弥生土器 甕	底径 10.2 残存高 8.3	外面 刷毛後ナデ, 赤色顔料 内面 ナデ仕上げ	雲母, 石英多い 橙(Hue2.5YR6/8)	赤く発色する 生地
	6	弥生土器 甕(底部)	底径 8.5 残存高 14	外面 縦方向ケズリ後ナデ 内面 ケズリ後ナデ	角閃石, 石英, 白色粒子 橙(Hue7.5YR7/6)	外面: 赤色顔料
	7	弥生土器 壺	胴部復元径 28 残存高 14	外面 横ナデ 内面 ナデ	角閃石, 石英, 白色粒子多い にぶい黄橙(Hue10YR7/4)	粗い胎土 外面:黒斑
	8	弥生土器 甕棺	口縁部直径50以上 残存高 3	外面 横ナデ 内面 横ナデ	雲母・石英・白色粒子多い, 赤色砂 橙(Hue5YR6/8)	
	9	弥生土器 甕	口縁部直径 (復元径) 31.8 残存高 8.1	口縁部:横ナデ 外面 上半:縦刷毛+斜刷毛 下半:縦刷毛 内面 横ナデ	外面:橙(Hue5YR6/6)~ にぶい赤褐(Hue5YR5/4) 内面:明黄褐(Hue10YR7/6)~ 灰黄褐(Hue10YR4/2)	胎土: 石英, 白色 粒子
	10	弥生土器 甕	口縁部直径 (復元径) 28 残存高 9	外面 ナデ 内面 横ナデ	雲母, 石英, 白色粒子多い 浅黄橙(Hue10YR8/4)	外面:摩滅
	11	弥生土器 甕(底部)	底径 8.4 残存高 9.4	外面 縦刷毛 内面 ナデ	雲母, 石英多い 外面:橙(Hue5YR6/8) 内面:褐灰(Hue7.5YR4/1)	
	12	弥生土器 甕(底部)	底径 9 残存高 4.8	外面 縦刷毛 内面 ナデ	雲母・石英多い 外面:橙(Hue5YR6/8) 内面:浅黄(Hue2.5YR7/4)	
	13	弥生土器 甕	口縁部直径 (復元径) 23 残存高 10	外面 口縁部:ナデ 胴部:縦刷毛 内面 ナデ	角閃石多い, 石英, 白色粒子 淡黄(Hue2.5Y8/4) 暗灰黄(Hue2.5Y5/2)	外面:スス 付着
	14	弥生土器 甕	口縁部直径 約28~29 残存高 13	外面 縦刷毛 内面 ナデ仕上げ	角閃石, 雲母, 白・赤色粒子 口縁部:黄橙(Hue10YR8/6・8/8) 外面:灰黄褐(Hue10YR6/2~4/2)	正円でない 外面:一部 剥離
	15	弥生土器 甕(脚台部)	底径 8.3 残存高 4.78	外面 縦ナデ 内面 ナデ	角閃石多い, 石英, 白色粒子 橙(Hue5YR7/6)	内面:暗褐色
	16	弥生土器 甕(脚台部)	底径 8 残存高 4	外面 縦刷毛 内面 ナデ	角閃石多い, 雲母, 石英 浅黄橙(Hue10YR8/4)	内面:暗褐色
	17	弥生土器 甕(脚台部)	底径 8 残存高 4	外面 ナデ 内面 ナデ	角閃石多い, 白・赤色粒子 浅黄橙(Hue7.5YR8/6)	外面:一部 黒化

6は大型の甕の底部で、外面にのみ赤色顔料の塗布が確認できる。極端に底部が薄く作られ、底部近くの器壁は非常に厚くつくられている。外面は削りのように強い刷毛調整と思われる。

7は壺の頸部から胴部にかけての資料である。断面三角形の低い突帯が貼り付けられている。器壁が非常に薄く仕上げられており、6とは対照的である。表面の摩滅が激しいが、外面には赤色顔料が塗布されていたものと思われるが、現在では確認できない。

8は甕棺の口縁部片であり、中型の甕棺であろう。

さて、1から7までの胎土について整理しておく。雲母片を多く含むものと角閃石を含むものに分けられる。角閃石を混入する場合は雲母片の混入が非常に少ないか、ほとんど見られないことが確認できる。角閃石を混入している土器は2・6・7であり、雲母片を多量に混入する土器はそれ以外の1・3・4・5・8となる。これらの土器の胎土には多量の雲母片が混入するものが多く、石英や白色粒子も目立つ。また、焼成すると赤く発色する生地であり、その上に赤色顔料が塗布されており、以下に紹介する甕類とは視覚的にもことなる特徴を持っている。

第18図9～17(図版21)は甕類の破片資料である。9・10は甕の口縁部片で、須玖式の特徴を持つ。口縁端部外面が下がる形態で、内面の突部分も突出が弱めである。いずれも外面には縦方向の刷毛調整が施されるが、10の外面は刷毛の後にナデ調整が施される。

11・12は甕の底部片で、外面に縦方向の刷毛調整が施され、同じく須玖式の特徴を持つ。11・12ともに底部中央部分は接地せず、器壁も底部は薄く作られる。とくに12の底部片は2mmほどの薄さで、底部は器壁により支えられている状態である。底部は筒状の底部に丸い円盤をはめ込むつくりである。これらの土器の胎土は1～8と同様に雲母片を多く含んでいる。形態的には底部直径がやや大きくなる特徴が見受けられる。この点は4区SB02やSB01などの覆土で検出された同様の須玖式の甕の底部形態に類似する特徴である。

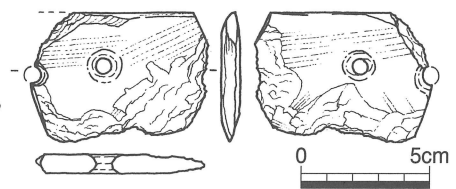
13・14は甕の口縁部片で、口縁部端部が上方へ反り、内部の突帯が内側へ弱く伸びる黒髪式の特徴を有する。外面には縦方向の刷毛調整が施され、煤の付着が目立つ資料である。頸部がほとんどなく、胴部の張りが無い形態である。口縁部直径は30cmほどに復元され、15～17の脚部片と合わせると、40cm前後の甕に復元できる。火力が無駄なく伝わるようになるのか、口縁部径に比べ、底部は小さく作られていることが理解できる。

15～17は甕の脚台部分で、端部は被熱のため赤く劣化している。15の外面は指による強い縦方向のナデ仕上げ、16は縦方向の刷毛調整による仕上げである。17は丁寧なナデ仕上げ。11・12の底部と比べ、非常に底部形態が小さく作られているのが特徴である。これら13～17は煤や被熱の痕跡から、日常的に煮炊きに用いられていたものと考えられる。

環濠出土石器(第19図 図版21)

第19図は環濠出土石器の実測図である。石包丁を加工したものであり、側面と表裏面と断面とを示した。石包丁としては刃部の形態は不明であるが、体部に二個の円孔をもち、一辺は直線的なものであったと思われる。側面・表裏両面ともにいくつかの方向で研磨が施されている。円孔は両側から穿孔されており、直径0.6cmである。側面図からみると、実測図で下にあたる部分に刃部があったものと思われる。

その石包丁を加工したものが出土品の最終的な形と思われる。実測図の正面で左下と右上とに直線的な部分があるが、これはほぼ並行する二辺となっている。両辺とも研磨されており、この加工品を特徴付ける。切断したあとの研磨加工と思われる。



第19図 23区 SD01出土石器(1/3)

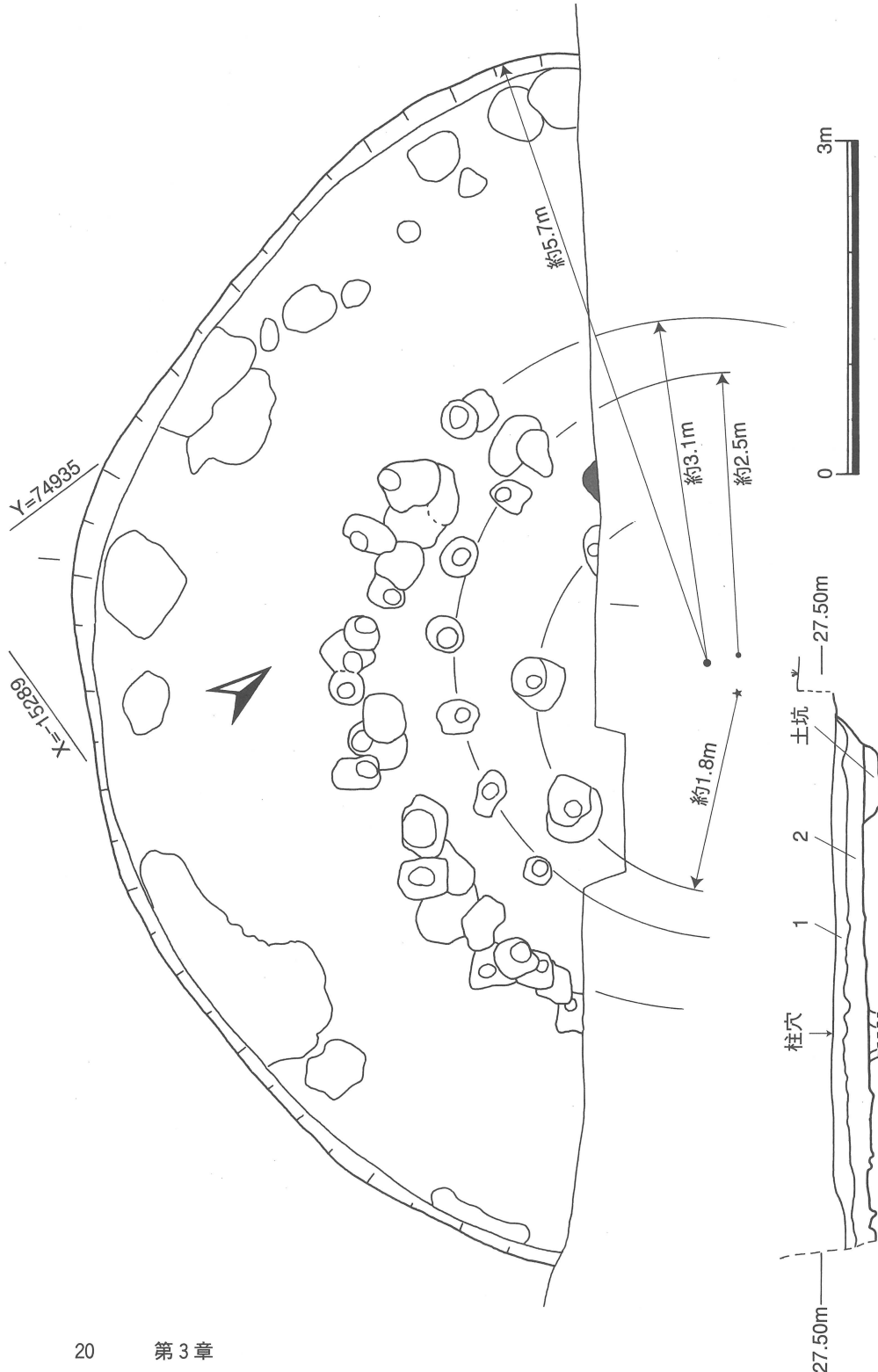
円形の住居跡 (32区 SB01, 32区 SB02・8区 SB01 第20~22図 第5表 図版3・4・10・11・21)

32区 SB01 (第20図 第5表 図版3・4)

およそ2/5ほどが調査範囲に、残りの3/5は調査区北側にある円形の住居跡である。その中心は調査区外にあり、第20図の星印などが図上で復元した中心である。検出された住居跡壁面の立ち上がりは、ほぼ垂直(検出面からの深さ60cmほど)となり、検出面での直径はおよそ12m、その中心は大きめの●印である。住居跡の構造は、壁面と同心円内に柱を円形にめぐらし屋根を支えたものと思われる。床面には固めの黄褐色土層が薄く貼り床として用いられていた。その床面上では第20図の一番外側の柱列が検出されており、最も新しい段階での柱列と考えられる。床面に用いられた黄褐色土層を取り除くと、

円形の柱列が3段階で確認できた。最も外側の柱列は、柱穴が3~4回ほど重複状態にあり、柱の掘り方が複雑に切りあっていた。この段階では柱の建替えがもっとも頻繁であったことが伺える。この段階に形成されたと思われる焼土が、床面上から北側(第20図アミ部分)で検出されている。調査区内ではその他に焼土などの炉の痕跡は見つからなかった。

その内側になる小さめの●印を中心とする柱列では、直径2.5mの円形に復元できる。この柱列は、柱穴の重複は見られない。



第20図 32区 SB01 (1/60)

もっとも内側に当たる柱列はその掘り方が大きく、中心は星印(★)となり、直径1.8mの円形に復元できる。この柱列も柱穴の重複はない。

住居の壁際にはいくつかの不正形の土坑が検出された。いずれももっとも新しい段階の柱穴に対応するものと思われるが、重複する土坑もあり、前段階の柱列に対応する土坑もあると思われる。

遺物は覆土中にまばらに5cm大以下の土器片が少量確認できたのみで、完全な形での土器の出土はみられなかった。床面直上での完全な形での土器は出土しておらず、破片資料もほとんど見られなかった。土器のほかには、火を受け変色した礫(10cm大~20cm大)が覆土中から出土している。

住居跡覆土の状況は、床面の他に明確に分層できたのは二枚である。両者ともほぼ水平な堆積を見せ、遺物の出土が非常に少なく、焼土塊などの出土もほとんどなかった。焼土粒子の出土は見られたが、集中するような状況ではなくまばらであった。覆土の土色や質が偏る部分もなく、踏み固められたような硬化した部分もなく、ほぼ様な土砂が一気に入れ込まれたと思われる。

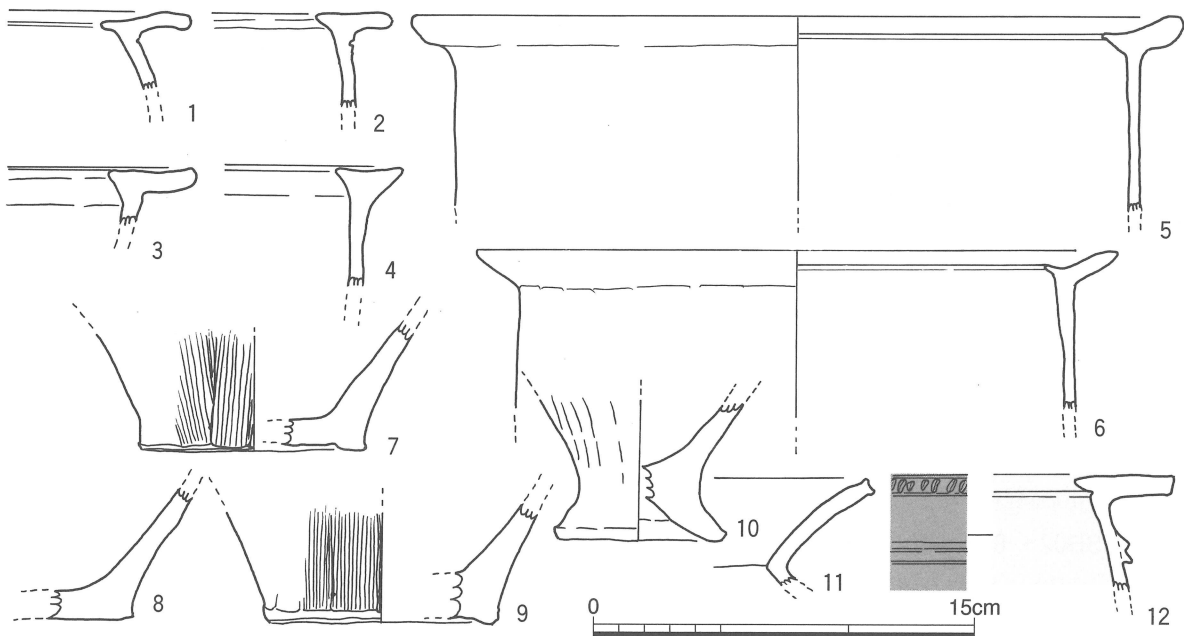
柱穴覆土は、柱痕跡の部分にはしまりのない土砂が入り込んでいるが、柱掘り方に入れ込まれた土は比較的粘性の強い黄褐色土と黒褐色土が互層に入れ込まれていた。柱材はすでに腐敗し黒褐色土に変化していたが、柱穴の状態から抜き取られた様子は尙えず、地上に出ていた部分は切り取られ、住居跡覆土が入れ込まれたと考えられる。その後土中に残された柱材が腐敗していったものと考えられる。

このような状況から、当遺構は複数回の立替え・拡張などを経て、土器や石器・木製品など生活にかかわる道具などが片付けられ、柱などの構造材が取り除かれた後に、一気に埋められたものと考えられる。住居跡の復元での床面積は102㎡、埋没に必要な土量は約60㎡である。当住居跡は柱穴の調査を行った後、真砂土約20㎡による保存処置を行い、遺構の保存に努めた。(図版11)

32区 SB01出土土器 (第21図 第5表 図版21)

出土土器のすべてでは図示できなかった。図化しているものの中で特徴的な土器片を紹介していく。

1~4はいわゆる須玖式の特徴をもつ甕の口縁部片である。1・2の外面には口縁部直下に一条の沈線がめぐっている。ほぼ水平に伸びる1・2とは異なり、3・4の口縁部上面には緩いくぼみをつくっている。1は頸部から胴部にかけて張りがあるのに対して、2・3・4は直線的に胴部が作られている。胎土は、1・3・4が角閃石を含み雲母が多く混入し、2が雲母を多く含み角閃石をほとん



第21図 32区 SB01出土土器(1/3)

第5表 32区 SB01出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法の特徴	胎土/色調	備考
21	1	弥生土器 甕	口縁部直径 36 残存高 3	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 雲母, 白色粒子 外面:明赤褐(Hue5YR5/6・5/8) 内面:褐(Hue7.5YR4/3・4/4)	
	2	弥生土器 甕	口縁部直径 22 残存高 3.6	外面 横ナデ 内面 横ナデ	雲母, 白色粒子・石英多い 浅黄橙(Hue10YR8/3), 一部:橙(Hue7.5YR6/8)	
	3	弥生土器 甕	口縁部直径 38 残存高 2.2	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 雲母, 赤・白色粒子 橙(Hue5YR6/6)	
	4	弥生土器 甕	残存高 4.6	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 雲母, 赤・白色粒子 外面:にぶい黄橙(Hue5YR7/2~7/4) 内面:にぶい橙(Hue5YR7/3・7/4)	
	5	弥生土器 甕	口縁部直径 32 残存高 7.6	外面 刷毛後横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 雲母粒, 白色粒子 外面:褐灰(4/1)口縁部:橙(Hue2.5YR7/6・6/6) 内面:褐灰(6/1~4/1)	スス付着
	6	弥生土器 甕	口縁部直径 25 残存高 6.2	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 雲母, 白色粒子, 赤色砂 にぶい褐(Hue7.5YR6/3)	
	7	弥生土器 甕(底部)	底径復元径 9 残存高 4.9	外面 縦刷毛 内面 ナデ	石英・白色粒子多い, 雲母粒子 外面:にぶい橙(Hue5YR5/3・5/4) 内面:褐灰(Hue7.5YR5/1)	
	8	弥生土器 甕(底部)	残存高 5.1	外面 刷毛 内面 ナデ	角閃石, 白色粒子 外面:にぶい橙(Hue7.5YR6/3~5/4) 内面:灰白(Hue10YR7/1)	
	9	弥生土器 甕(底部)	底径復元径 8.8 残存高 4.7	外面 縦刷毛 内面 ナデ	雲母・白色粒子多い, 石英 外面:にぶい赤褐(Hue5YR5/3・5/4) 内面:褐灰(Hue7.5YR5/1)	
	10	弥生土器 甕(脚部)	底径 7 残存高 5.4	外面 刷毛 内面 胴部:ナデ 台部:刷毛	角閃石, 雲母・赤色・白色粒子 明赤褐(Hue5YR4/6・4/8)	
	11	弥生土器 壺	残存高 4.3	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 雲母粒, 赤色砂 浅黄橙(Hue10YR8/3)	
	12	弥生土器 甕	口縁部直径 36 残存高 4.5	外面 赤色顔料(丁寧) 内面 赤色顔料(薄い)	雲母粒子多い, 石英 にぶい橙(Hue7.5YR)	

ど混入しない。それらのほかには2が石英を多く含み、1~4に共通するのは白色粒子を含む点である。口縁部の復元直径は1が36cm、2が22cm、3が38cm、4は復元不可であるが20cm前後であろう。

5・6はいわゆる黒髪式の特徴をもつ甕の口縁部片である。5が口縁端部を厚く肥大させるのに対して、6は単純な仕上がりとなる。5・6ともに外面は刷毛調整を施しているが、そのあとナデ調整が行われており、明瞭には残っていない。5の外面には明瞭に煤が付着しており、煮炊きに頻繁に利用されていたことが伺える。胎土は角閃石を多量に含み、雲母片も混入している。

7~9は須玖式の特徴を持つ甕の底部片である。外面は縦方向の刷毛調整が胴部最下位まで施され、底部は上げ底状に周縁部のみが着地している。底部の厚みや直径から比較的大型の甕に復元できる。胎土に多量の角閃石を含むものはなく、生地は5や6に比べて精製された感が強い。

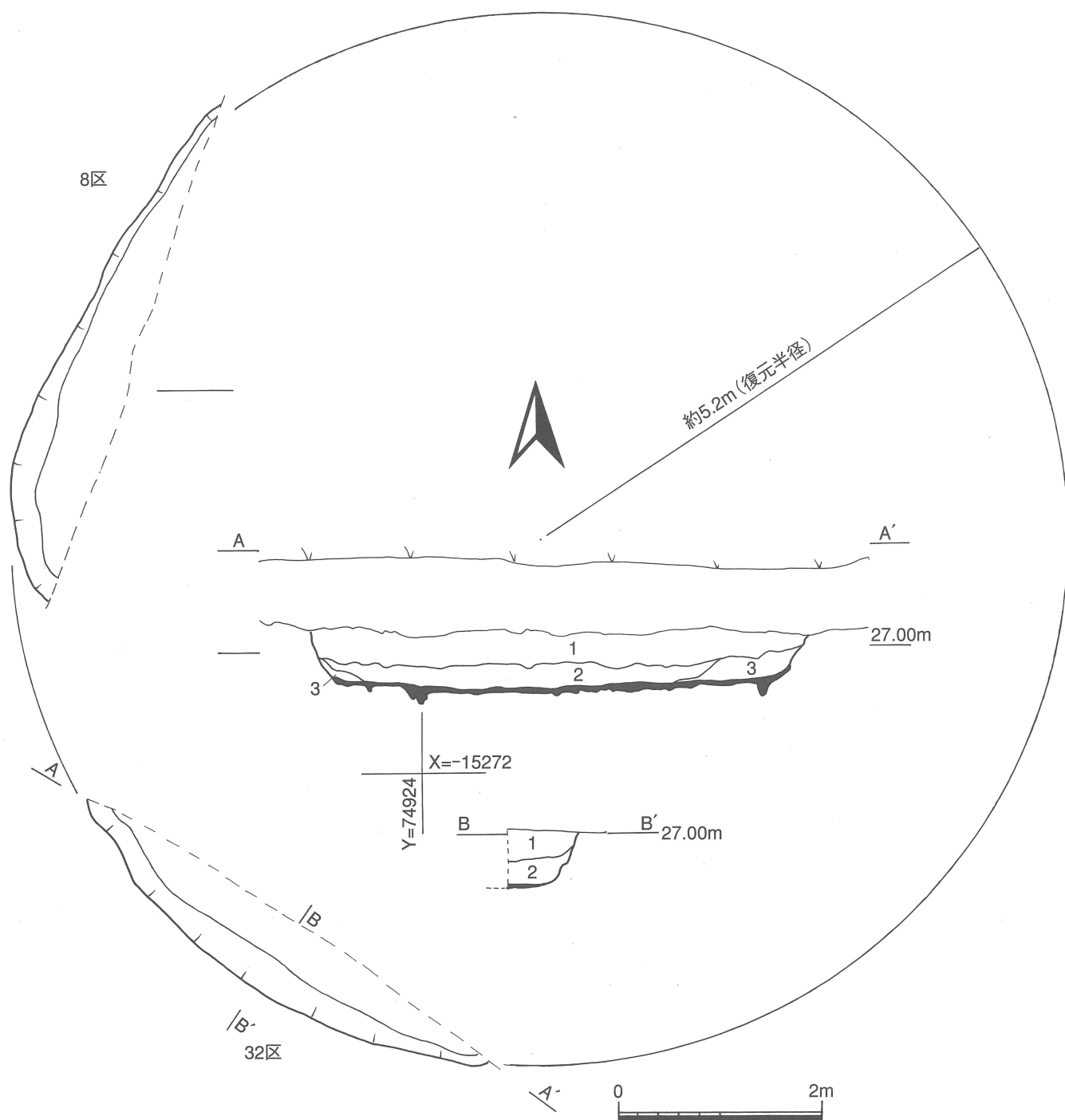
10は甕の脚部片である。底部直径が小さく、裾の広がりが強くない形態である。7・8・9などの甕の底部と比べると、底部が小さく不安定な感が強い。第29図4区SB02出土品9を参考にする、6や5などの口縁部片などが対応するものと思われる。角閃石を多量に含んだ胎土で、端部は赤く変色しており、火を頻繁に受けていたことが伺える。11は壺の口縁部片である。外反し端部が丁寧につまみあげられていることが特徴である。内外面ナデ仕上げで、胎土には角閃石を多く含む。12は甕の口縁部片である。外面は丁寧に赤色顔料が塗布されるが、内面には薄く塗られる。口縁端部には刷毛工具による刻みが施される。その刻みの中には赤色顔料が厚く入り込んでいる。口縁部下には断面「M」字の突帯が貼り付けられている。口縁部の復元直径は約36cm、1や3などと同様な数字であり、高さ40cm程度の甕に復元できる。

32区 SB02・8区 SB01 (第22図 図版3・4・11)

この住居跡は調査時期と調査区をまたいでの検出であるため、図面上では若干のゆがみが見られるが、直径10mほどの円形の住居跡に復元できる。検出面からの深さは約60cm、32区SB01と異なり、

壁は丸みをもって立ち上がっている。32区 SB01との距離は約20m、4区 SB01との距離は約15m、4区 SB02との距離は約25m。いずれも上屋構造を考えると重複しない距離にある。柱穴などは調査区内には認められず、具体的な構造は復元できないが、32区 SB01と同様の構造と考えられる。

住居跡覆土は上下の二枚に分けられ、下層は壁際に分層できる部分（3層）がある。遺物は5cm大のものが多く、完全な形での土器の出土はなかった。第22図セクション図のアミかけした部分が床面となり、黄褐色粘質土を薄く敷き詰めて土間としている。壁周溝のような施設は見られなかったが、断面には東側の壁際に幅5cm程度の溝が確認できたため、存在の否定はできない。出土土器は小片が多いため、図化していないが、前掲32区 SB01出土品と形態的に類似する土器片が出土している。



第22図 32区 SB02(1/60)

方形の住居跡（4区 SB01・02 第23～29図 第6～7表 図版4・12・13・21・22・23・24）

4区北側では、方形の竪穴住居跡が2軒検出されている。（図版4）SB01とSB02であるが、SB01では明確な床面や柱穴が検出されたが、SB02では床面や柱穴の検出があいまいなものであった。そのため、SB02については規模的にはSB01と同様な方形の竪穴住居であるが、最終的には祭祀関連の土器を廃棄した土坑として利用されたのかもしれない。廃棄土坑という形での検出であったために明確な床面などが検出されなかったのであろう。以下に個別に報告していく。

4区 SB01（第23図 図版4・12・13）

4区北側で調査区西側に方形の竪穴住居跡が検出された。（図版4）主軸は真北から西へ12度寄っており、南北4.5m以上、東西4m以上の規模、平面形は隅丸方形に復元される。西側半分は調査区外にあり、調査で確認できたのは東側半分のみである。表土下に一様にみられる赤褐色粘質土、その下に褐色粘質土層、黒色粘質土層があり、黒色粘質土層の除去後に方形のプランが検出された。

その方形プランに従い、十字に畦を残して4分割で調査を行った。第23図B-B'、C-C'はそのセクションである。覆土は中央部分に厚く堆積する傾向にあり、いわゆるレンズ状になる。床面にはアミかけをしているが、その上には黄褐色粘質土ブロックが混入した黒色粘質土（Ⅲb層）がはいり、その上には黄褐色粘質土ブロックの混入しない黒色粘質土（Ⅲa層）が入っている。C-C'セクション東側には床面直上に黄褐色粘質土を主体とする土（Ⅲ'層）が三角形に堆積している。一部ではⅢc層を削っているので、竪穴住居廃棄直後に入れ込まれた土砂と考えられる。おなじような黄褐色粘質土の三角形堆積は、B-B'では確認できないが調査区壁面には確認できる。竪穴住居の周囲の多方向から入れ込まれた様子が伺える。そのため、この黄褐色粘質土層は竪穴住居の周囲にめぐらされる周堤帯を形成していた土ではないかと考えられる。第23図のD-D'を結ぶ礫（20～15cm大）は住居跡と軸が一致し、この住居にかかわるものと考えられ、おそらく周堤帯に関連のあるものと考えられる。そうすると住居跡の検出面は、限りなく当時の生活面に近いことになる。

床面は黄褐色粘質土と黒褐色粘質土との混合土で、中央付近は踏み固められ硬化している。Ⅲc層は床面にのる堆積土であるが、炭化物を多く含んでおり住居の廃棄過程の中で入れ込まれた土砂であろう。Ⅲ'層に切られているので、住居内の什器が取り除かれ、構造材が取り除かれた後から住居が完全に廃棄されるまでの段階で入り込んだ土と思われる。このような住居の廃棄過程が復元できるため、調査段階から想定されたのであるが、完全な形での遺物は残っておらず、覆土中に多くの土器片が検出された。床面直上の遺物も確認できたが、完全な形のものはいない。

焼土は床面硬化面内部で二つ検出されており、いずれも炉として利用されていたものと思われる。調査区外に広がるものの詳細は不明である。焼土の範囲は二本の突起をもつ平面円形である。レンズ状に緩く掘り窪められたもので（A-A'）、酸化して赤化した部分が3～5cmの厚さで確認できた。

柱穴は明確なものは1つのみであるが、直径30cmほどの円形の掘り方に12cmほどの柱痕跡を確認した。深さは床面から8cmまでを調査している。

炭化した木材が複数検出され、南東コーナーに集中している部分も見られた。その集中地点には土坑が掘られており、住居の廃棄に伴い掘られたものであろうか？

上記のような検出状況であるため、この竪穴住居は掃除され、周堤帯も崩され、多くの土器片を含んだ黒褐色粘質土も人為的に入れ込まれるなどの工程を経て丁寧に廃棄されたものと考えられる。

4区 SB01出土土器（第24図 第6表 図版21・31）

住居跡覆土からは多くの土器片が出土したが、実測したものの中で特徴的なものを報告していく。

1～6・10は甕の口縁部片であるが、須玖式の特徴をもつ。いずれも外面に縦方向の刷毛調整を、

内面は丁寧にナデが施される。口縁部の直径は復元で31~37cmの間にあり、胴部の張りも類似しており、同様な形態の甕に復元できる。胎土にはすべて雲母片を多量に含んでおり、石英なども含む。

7~9は甕の底部片であり、いずれも底部は全周しない。これも須玖式の特徴をもち、底部直径は7cm, 9cm, 11cmに復元できる。外面は7・9で底部まで縦方向の刷毛調整, 8はナデ調整である。底部の厚みは, 7で8mm, 8で2cm, 9で1cmと23区SD01に比べ厚めにつくられている。胎土にはいずれも雲母を多量に含んでおり、石英や長石も含まれている。



第23図 4区SB01(1/30)

第6表 4区SB01出土土器観察表

図	番号	種別	法量 (cm)	胎土/色調	備考
24	1	弥生土器 甕	復元口径 34 残存高 18	内外面: 橙色 (Hue5YR6/8), 暗灰黄色 (Hue2.5Y5/2) 雲母, 2mm以下の長石・石英	焼成良好 スス付着
	2	弥生土器 甕	復元口径 32.4 残存高 7.9	内外面: におい黄橙色 (Hue10YR7/4), 浅黄色 (Hue2.5Y7/3) 2mm前後の長石・石英, 雲母	焼成良好 外面: スス付着
	3	弥生土器 甕	復元口径 32.8 残存高 7.45	外面: 明赤褐色 (Hue5YR5/6) 内面: 暗灰黄色 (Hue2.5Y5/2) 雲母, 角閃石, 赤褐色粒, 微細な長石・石英	焼成良好 外面: スス付着
	4	弥生土器 甕	復元口径 34.6 残存高 4.1	内外面: におい赤褐色 (Hue2.5YR5/4), 明赤褐色 (Hue5YR5/6) 微細～2mm前後の長石・石英, 雲母・赤褐色粒	焼成良好 口縁部: スス付着
	5	弥生土器 甕	復元口径 36.2 残存高 7.75	内外面: におい褐色 (Hue7.5YR5/4), 橙色 (Hue2.5YR6/6), 明赤褐色 (Hue2.5YR5/6) 雲母, 赤褐色粒, 2mm程度の長石・石英	焼成良好
	6	弥生土器 甕	復元口径 34 残存高 5.15	内外面: 明赤褐色 (Hue2.5YR5/6) 雲母, 微細～3mm程度の長石・石英	焼成良好 口縁部: スス付着
	7	弥生土器 甕	復元口径 7 残存高 4.9	外面: 浅黄色 (Hue2.5Y7/3) 内面: 暗灰黄色 (Hue2.5Y4/2) 1mm～3mm程度の石英, 雲母・白色粒子多い	
	8	弥生土器 甕	復元口径 8.9 残存高 5.7	外面: 明赤褐色 (Hue5YR5/6) 内面: におい黄橙色 (Hue10YR7/3) 1mm程度の角閃石・石英・白色粒子・雲母多い	
	9	弥生土器 甕	復元口径 11 残存高 7	内外面: 橙色 (Hue5YR6/8) 0.1mm～0.2mmの雲母粒子多い 1mm～0.1mmの白色粒子, 石英粒子	
	10	弥生土器 甕	残存高 7.45	内外面: 灰黄色 (Hue2.5Y6/2), におい褐色 (Hue7.5YR6/3) 雲母, 微細～2mmの長石・石英	焼成良好
	11	弥生土器 甕	残存高 4	内外面: におい橙色 (Hue7.5YR7/4), 褐灰色 (Hue7.5YR6/1) 角閃石, 雲母, 石英	
	12	弥生土器 甕	復元口径 33 残存高 3.3	外面: におい褐色 (Hue7.5YR7/3), 褐灰色 (Hue7.5YR4/2) 内面: におい褐色 (Hue7.5YR7/3) 角閃石, 石英, 赤・白・黒色粒子	
	13	弥生土器 甕	残存高 4	内外面: 浅黄色 (Hue2.5Y7/3), 黒斑有り 石英, 角閃石, 雲母	
	14	弥生土器 甕	復元口径 29 残存高 7.2	内外面: におい褐色 (Hue7.5YR6/3) 雲母, 角閃石, 黒・白色粒子	
	15	弥生土器 甕	復元口径 20.8 残存高 4.3	内外面: におい黄橙色 (Hue10YR6/4), 浅黄褐色 (Hue10YR8/4), 褐灰色 (Hue10YR5/1) 微細な石英・長石・赤褐色粒, 角閃石多い	焼成良好
	16	弥生土器 甕	復元胴部 26 最大径 25 残存高 25	外面: 上半・におい黄橙 (Hue10YR7/4), 下半・におい黄褐 (Hue10YR5/3) 内面: 褐灰色 (Hue10YR4/1) 1mm～2mm程度の石英, 雲母, 白・黒色粒子多い	
	17	弥生土器 甕	復元口径 28 残存高 4.6	内外面: 橙色 (Hue5YR6/6～6/8) 1mm～2mm程度の白色粒子	表面もろい, 摩滅している
	18	弥生土器 甕	復元胴部 26.4 最大径 9 残存高 9	外面: 赤色顔料 内面: 灰白色 (Hue10YR8/2) 1mm程度の砂粒 (石英・白色粒子) あまり多く混入されていない	
	19	弥生土器 甕棺	復元口径 10 残存高 3.9	内外面: 橙色 (Hue5YR6/8) 2mm～5mm程度の石英・白色粒子	表面が磨滅
	20	弥生土器 高坏	残存高 11	外面: 橙色 (Hue2.5YR6/6), 赤色顔料残る 内面: 橙色 (Hue2.5YR6/6) 0.1mm～2mmの白・赤色砂粒 精製されている。	表面が 剥がれている 赤く発色する胎土
	21	弥生土器 高坏(深い)	復元口径 32 残存高 4.5	内外面: 橙色 (Hue7.5YR7/6), 赤色顔料が全体的に少々残る 0.5mm～1mm程の白色粒子, 雲母粒子, 赤色砂粒	精製されキメ細かい
	22	弥生土器 高坏	復元口径 34 残存高 3.4	内外面: 浅黄褐色 (Hue10YR8/4) 1mm～5mm程の石英粒子が目立つ, 1mm～2mm程の白色粒子	
	23	弥生土器 高坏	復元口径 30.3 残存高 5.9	内外面: 明赤褐色 (Hue2.5YR5/6), 赤褐色 (Hue2.5YR4/6) 微細な長石, 石英, 雲母, 赤褐色粒	部分的にマモウ 全面赤色顔料, 焼成良好
	24	弥生土器 甕	復元口径 29 残存高 4.5	内外面: におい褐色 (Hue7.5YR5/4), におい褐色 (Hue7.5YR6/4) 石英, 角閃石, 雲母	
	25	弥生土器 壺	残存高 6	外面: 赤色顔料 内面: 黒褐色 (Hue10YR3/1) 1mm程の砂粒を若干, 金雲母多い	
	26	弥生土器 壺	残存高 6.4	内外面: 赤く発色する生地 雲母粒子多い, 1mm～2mm程の白色粒子	
	27	弥生土器 壺	復元胴部 24.4 最大径 6.3 残存高 6.3	外面: 赤色顔料 内面: におい黄褐色 (Hue10YR7/2), くびれ部から上赤色顔料 1mm程の砂粒を若干, 金雲母多い	
	28	弥生土器 小甕	復元口径 12.5 底径 9.5 残存高 10.95	外面: 明褐色 (Hue7.5YR5/6) 内面: 明赤褐色 (Hue5YR5/6) 雲母, 微細～3mm程度の長石・石英	焼成やや不良
	29	弥生土器 甕棺	突帯部直径 54.2 残存高 8	内外面: 橙色 (Hue7.5YR7/6) 2mm～5mm程度の石英・白色・雲母粒子	